忠孝友愛

嘉村陸軍歩兵少尉は、福岡第廿四聯隊第七中隊附として、九連城總攻撃に奮闘勇戦し、遂に名譽の負傷者の一人となりしが、少尉が負傷前家郷に送りし書翰は其の親に對して孝、兄弟にたいして友愛の情を呈露しぬ。

當地附近には露兵は影だに見えず候故是より平壌を取り鴨綠江を渡り進んで滿洲に攻入り恨重なる露國の奴輩を兎狩る如く一方より斬まくり輝く日本の武威を充分に發揚致し彼等をして城下の盟を致さすべく何卒其日を御待被下度候我等は之さへ爲し得ば本望にて死しても決して遺恨無之候我の戰死を嘆するよりも國家の大慶を祝し被下度候始めての戰陣に候故如何と御心配も有之可く候も假令深入り仕過ぎて倒るゝ事はあるとも後より遲るゝ事は致さぬ覺悟殊に出軍の際に御訓戒も承り候故充分確守仕り申すべく見苦しき擧動は致さず候何卒私の爲め武運強くして花々しく討死致す樣氏神樣へも御祈被下度御頼申候

二月二十二日

嘉村平作樣
嘉村才太郎樣

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

拜呈出征中は充分貞操の道を守り特に實家の母上樣には倍舊の孝養を盡されんことを希望に不堪候私情に牽かれ世人の笑と共相成候ては永久の家の恥辱に候故篤と御注意申上候先は御別迄　敬具

達次郎

四月十四日

お姉上様
お春様

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

さて此度の戰爭は實に古來稀なる大戰爭に候得ば双方共多數の死傷者有之可く又永く續く事と被察候就ては私は到底生きては歸らぬ覺悟に候故若萬死の中に一生を得て歸るともそれが何時やら圖り難く候故國元出立の際詳に書き遺せし如く留守中は私に代り善く母上様に孝養を盡し亡き父上に對しても誠心込めて菩提を弔ひ被下度且つ幼き政夫を守り育て成人して我家を繼ぐの日を待たるべしそれ迄の內は如何なる困難に遭遇すとても姉妹共に心を協せ力を合せ孝養の道を守り傍ら學業を勵み以て母上様の心を安じ父上様の魂を慰め被下度決して些細の苦勞に遭ひて孝悌の道を破る

様の事なき御覺悟有之可く重ね〳〵御注意申上候此兄上の出陣に就き望みは只此事のみに候匆々

三月十六日

まつ様
こと様

達次郎

車中の櫻花

陸軍中佐伊豆凡夫氏出征の途知友に寄せたる書簡は、實に奥床しくも英雄胸中日月寬なるの趣を示しぬ。

拜別後汽車にて大に歡迎を受けつゝ京都を通過致候處一女子の櫻花を附したる短冊を汽車室へ贈り呉れ候。其歌に

おく露はよし多くとも日の本の

ますら武夫ぞはらひつくさん

と有之候。流石京都人のヤサシキ贈りもの、答へすんば武人の無風流を笑はれんと、小生は師團司令部を代表して、其の婦人に返し歌、

さゝけゆきてうらるの山に挿し植えん
君が手折りし山櫻花

とやらかし申候。

二十七八年の役、第二軍司令部の輸送にて、關ケ原を過ぐる時合作の詩あり、

燈如燎火二兩三村。　蟲々秋風啼二野猿一。
汽車截レ月過二關原一。　當日英雄今何在。

と吟誦致候事を回想して、一層の感を添へ候間、此度は左の如く吟じ申候（其時雪激しく降りたり）

旭旗飜處幾村々。　萬歲聲高欲レ撼レ山。
汽車衝レ雪過二關原一。　當日英雄今何在。

之を同室の鎌倉圓覺寺の宗演禪師に示し候處、禪師亦一絕を賦して、

火輪忽過古戰寰。　春寒料峭徹二心肝一。
白盡英雄埋骨山。　天降二瑞雪一壯二行色一。

斯くの如き有樣にて著し候。

大封筒に小書信

霞艦長大島正毅氏、三月十二日其の鄉里なる栃木縣芦野郡下芦野なる家嚴大島豐平氏へ一封を寄せぬ。書は大形の封筒に收めあるを以て、家嚴は定めて詳細なる音信ならんと取急ぎ開封したるに、何ぞ圖らん筆太に認められたる左の寥々たる短文ならんとは。

拜呈豚兒對敵行動に從事致せるも無事御安堵可被下候敬具

父上様

正毅

艦中の觀花宴

四月初旬の事なりき、瓜生司令官の許に爛熳たる櫻花を寄贈したるものありしかば、之れを同僚の人々に分與してけるに、莊司新高艦長は之れを得て、此の上なく打ち喜びぬ。時恰も三日の神武天皇祭に當りしかば、艦長室に生け、下士官以上を集め盛筵を張り、蓄音機などを吹奏して、海上戰陣の鬱を慰めぬ。時に副艦長たる淺野少佐は、左の詩を賦して朗吟せり。風流佳話として傳ふべし。

三旬砲火不相酬。
無聊客情春日脩。
獨有蠟管解消息。
音容髣髴阿嬌柔。

瑞兆の鷹

我が軍勇將猛卒に富むと雖も、亦た天祐のあるあり、神武東征以來、屢〻吉瑞は物によりて示されぬ。若し理學的の冷かなる眼より見るあらんには、別段奇しき事にもあらざるべけれど、天を信ずる人類には、之によりて頼む處を得るなり。志津田航海長及び桑島主計長の、其の知友に寄せたる書翰も其の事實を記しぬ。

拜啓足下の相識れる予等は今尚ほ目醒ましき戰爭に加はるの期來らず誠に遺憾千萬なれども役目が敵の主力に當るものなれば一日も早く大戰を爲してメを刺して御目に掛けテストの萬歳を唱へばやと張る心は滿月形の梓弓なり扨も其後も御承知の通り空前の

閉塞事業只嘆稱に堪へざるのみならず昨十三日の第七回事業は如何に慘烈且つ愉快の日ぞや夫れかあらぬか本艦にては前夜(十二日)進軍中午後八時半一羽の鷹舷首に止まりたれば本艦閉塞隊の勇士安保助藏之れを手捕にせりヨク〳〵見れば之れ美麗なる鷹なりし斯る大洋中にて此吉瑞は之れ所謂靈鷹として明日の成功をば豫期したりしが果して翌日は敵の旗艦爆烈せり其夜午後八時又々一羽の鷹本艦の檣上に宿る再び之を捕へたりしが是亦た美麗なる鷹にして何たる吉瑞なるやとて又外に一隻の敵艦は屹度破壞せられしならんと豫言したりしに之れまた果して他の戰鬪艦一隻破壞せることは誠に不思議の事として御話し申すなり實際眞面目に御通知は到底相叶はざること殘念なれども御承知の通り小生は航海夜當直或は戰鬪及び規定の戰鬪日誌等の編成など安閑として一日を送ることは實際之れなく御推察あらんことを願ふなり今回の戰鬪にて敵將而かも世界唯一の名將沒せりと云ふそれより一種の論據出でん勇士隊に充ち皇國の御稜威無限なること御互に祝ふ可し

四月十四日

桑島主計長
志律田航海長

靈鷹の捕獲者

我が軍艦淺間は遙に清國の山東角を雲煙の間に臨みつゝ、煙濤を破りて航行中、一羽の鷹は來りて檣頭に止りぬ。夫と見るより一個の壯夫攀登して之を捉へり。此の壯夫は即ち長崎縣小城郡小城町出身の八頭司兵曹なりけり。氏は靈鷹捕獲に就て家鄉に一書を送る。

前略既に御承知の如く敵艦は再三の戰にて少からぬ損害を受け專ら修理に忙しき事と被存候折柄なれば到底洋中に出で丶戰ふ氣力は六ケ敷と思考申居り候併し死者狂なれば少も猶豫出來不申候吾々の望みは敵が一日も速に修理を了して天晴なる一大戰爭を相待ち申居り候我が艦隊にては日々警戒注視を怠らず施行致居り候本艦は四月一日某地を發し翌二日敵地方附近に航行中玆に不思議なる事は天明頃小生は後部艦橋上に一小尉及び兵員三名と共に當直中何より飛來りしにや一羽の鷹は小生に捕へられよと云はんばかりに右肩に脚を休め申候其羽音と同時に小生の左腕掌中に容易に生どり捕へたり乘組員續々集まり來り相共に吉報ならんと打悦び申候戰友小生に語りて君は鷹の頭なり停る所も澤山あるに身動きもせず捕へられたるは誠に奇と云ふべしと而して此種の鷹は十年前日清戰爭中小生事高千穗にて捕へたると同種の產に有之候然るに頃もよし神武天皇祭の前日なり殊に鷹は身小なるも大鷲を致命せしむと云ふ時節柄大に前兆の吉報と被存候將た又本艦八代艦長は其當時同じ高千穗艦砲術長の職を執られし御名譽なる御人に有之再度戰爭を仕る身にて一度ならず二度までも鷹を捕ふるとは可祝事と存候殊に二十三年の春頃に肥前にて其名も高き中林梧竹先生より贈與に預りたる絹布頸面に大書して揚鷹と書したるこそ實に命當し何等かの宿緣と存ぜられ候八代艦長より大切に愛育するやう御命令有之又鷹は籠中自若として生鼠を一握に喰し居り何分とも生者を食ふには大に困入り申候艦內兵員にて鼠を捕へ與へ愛育中に御座候

氏は此の靈鷹が計らずも大本營に獻上せられて畏き邊より御命名あ

りしよしを聞き、感激して又も一書を家郷に裁せり。

一昨十七日吉報後本日只今(四月十九日)大本營より左の通り電報奉拜受候

タカハ一四ゴゼンカイギノトキ　ケンヲヨウシ　ヤトウジト
ゴメイメイアラセラレタリ　タカラベサンボウ
右御打電の如く不肖徳一郎家姓其儘御命名被爲在候は誠に畏多き次第殊に十年前高千穂生擒の鷹も曙と名づけられ今猶宮中雲深く飼養せらるゝ由拜承候は何たる一身の光榮家門の名譽にやとありて、其嬉さに和歌一首を添へぬ。

大君の恵みも深き大海原
　數ならぬ身の名こそあふれき

戰陣の佳話として傳ふべきにあらずや。

戰友の功名を羨む

拜復仕候

東洋の天に戰雲動き居候得共陰陽時を違へず春風春海に渡り花間鶯聲を聽く最も長閑の世と相成申候處益御壯健に御消光被遊候由時々御手紙にて拜承即時御返事も不致候欣喜此事に御座候下而小生事至極無事勤務罷在候事乍憚御放念被下度候

偖過る二十七八年日清戰役の時は甚だ幸運にも軍艦秋津洲にて討敵運動を採り時折の海戰は、悉く網羅致候而無此上愉快に浴し居り候ひしが偖々此千載一遇の今度の戰には如何なる不運の事に候や未だ一度も敵影は無論の事敵の港灣も不窺候樣の意氣地なき始末にて乍自分呆れ果て申候從而未だ一度も砲聲さへ耳に不致樣の義

にて戰爭をなし居候にや機動演習にてもなし居候にやと被疑候程に御座候日清戰爭の時は驍名天下に轟き申候軍艦松島も世の進歩と取る年波には勝たれ不申今や〇〇〇〇〇〇の御役目而已にて只々戰友の功名を羨み居候許りに御座候隨分此度の戰爭は長引き申候由世人の噂に御座候が其間一敵も不見して終局に近き申候樣の事あらむには如何に〳〵殘念に候はんか世の人々にも國民にも軍人としては合はすべき顏も無之事と懸念罷在候併し尙前申通り若々長き事に候得ば其中には幸運に回はり合はす時も可有之乎と賴み無き賴みを容賴致居候許りに御座候

其爲旅順戰報等と申すも只々〳〵新聞に載る事を一日位早く承知致候迄にて到底戰爭の事柄は談申上候資格は無き事に御座候

とは申せ戰時の事に御座候へば艦の行動は一切秘密を保つべき事にて毎日々々何を爲し居候やも申上ることは今日の處出來不申候但々〇〇近海にて至而息災に事もなく其日々々を暮し居候と御推察下し置かれ度候鎌倉表柳子元より時々手紙文通有之同家に於て壁抔親切に世話致し呉れ候模樣故其義は甚だ安心致居候事に御座候

父上樣には益々御健かに被爲渡誠に〳〵御芽出度大慶申上候小生も指折り數へ申し候へば最早三十四と相成申候氣は二十代の樣に御座候へども自ら懲かれ申候

尙申上度事山々有之候得ども取急ぎ御返事而已申上度如斯に御座候頓首

三月二十八日

父上樣御許へ

菊太郎拜

這は是旅順第三回の閉塞の擧に於て、朝顏丸の指揮官として、行方不明となりし向海軍少佐が嚴父の許に寄せたる書信なり。氏が滿身の勇を揮ふに由なく、脾肉の嘆に堪へざるの意歷々として見るべし。今回の機は氏が志を達すると同時に我海軍が有爲の將校を失ひたるは惜む可し。夫人菊重子は三十六年冬一子を遺して世を去り、少佐は亡夫人の令妹柳子を後妻とすべき、內約ありしが、今や世に亡き人の數となりぬ。紀念に殘る幼兒を護る其人の心や如何に。

命を天に任すのみ

『遠江丸は防材に衝突し港口の半を閉塞爆沈したり』とは東鄉司令長官が第三次旅順口閉塞に關する報告の一節なり。海軍少佐本田親民氏は實に之れが指揮官として負傷したる人なりき。少佐は鹿兒島市荒田村に生れ。今は東京芝區二本榎町に住み、其の留守宅は夫人志那子守り居りぬ。大尉は體幹強健なる偉丈夫にして專ら砲術水雷術を研究して造詣する處あり。令名夙に海軍部內に高く、又柔術を嘉納治五郎氏が設立にかゝる弘道館に學び、達人を以て推さる。海軍兵學校敎官より富士艦に轉じ、今回扼群の功を奏するに至りしものなり。第二回閉塞の事決行さるゝや、氏は書を家族に寄せて注意する處あり左の如し。

前畧さて先日の戰にて廣瀨武夫君は花々しき最後を遂られ誰人も賞嘆愛惜して措かず實に武人の美望に堪へざる次第に有之次回の戰に於ては私も運命如何に相成べきや此國家存亡の分目の大戰爭に於て自己の生命の如きは殆ど眼中に無之只管報國の一念に驅られ居申候御身等は折角御主人の御留守を堅固に守り子供を善く敎育して早く國家の爲に立しむる樣御心懸肝要に御座候

氏が希望したるが如く、第三回閉塞の壯擧あるや、遂に遠江丸の指揮官となりて之れに臨みぬ。程に上る三日前左の書柬を夫人の許に寄す。

今度の戰には必死を覺悟致候軍人戰に臨み生死を云々するに足らず唯命を天に任すのみ後事は萬端出征の當初に申遺せし通り御身も健全にして安々と遺子を産落し三兒を守育可被成下候今辭世に臨み拙者積年口邊に貯へたる疎髯を切捨遺物として留置候茲に封入せるは右方の髯にして左方の分は家兄と妹に宛てゝ送附致候間左樣御承知可被成下候匆々不備

明治三十七年四月三十日

大日本帝國軍艦富士に於て

親民

志那子殿

辭世

死といはず生ともいはずいまさらに
くにの爲めにとたゝ思ふ身は

親民

遺品の鏡

犬塚海軍大尉は閉塞船愛國丸の指揮官として旅順口の第三次閉塞の壯擧に加はり、勇名を揚げ、殊勳を樹てたる人なるが、日露戰を開き、我が艦隊は堂々として黃海の波濤を破り、旅順の敵艦攻擊の途に上らんとするや、氏は一封を故郷の父の許に寄せぬ。

前畧近き將來に於て戰機の一大發展を見ることを期す此時に當りては愚事も亦功名と榮譽を配たるべき一人ならんとを期す戰ふこ

と數度未だ吾が意を滿たすに足らず吾人は功なくして吾が熱誠なる國民の血を吸ふの感あり豈難に當り艱を排するの事業なくして可ならんや軍人素より生還を期せず吾人兄弟出征せば既に名譽ある死處を得たりと御思召置被下度軍人の覺悟今更多言を要せずと雖も更に一言を述べて生別の辭となす

四月五日　　太郎

御兩親樣

斯くして幾たびか旅順の攻撃に參加し、第三次閉塞に赴くに當り。

此度大任を負ふて重使命を帶び旅順に向ふ先は一寸御通知まで草々拜具

五月一日　　太郎

御兩親樣

との簡短なる通知書を發して其の程に上れり。重使命とは閉塞の壯擧なること後にぞ思ひ合はされたり。父母は此の簡短なる書狀に接すると間もなく廣瀨大島艦長より一翰來りぬ。

拜啓某地點に於て太郎殿に御訣別申上候に付何か紀念品殘され度旨小生より懇請致し鏡一個殘され正に預り申上候太郎殿には五月一日午後五時雄々敷御出航相成御武運長久を祈り成功を期待致候

不備

勝比古

五月一日

犬塚德四郎殿

追而鏡は注意保存を要し候もの に付好時機に御届可致候

鏡を以て遺品となす、武士の魂を留めて永く汗青を照らし世の鑑となる、何ぞ其の壯烈なる。大尉は其の鏡に添ゆるに左の一書を以てせり。

愛國丸紀念として鋺一枚を送る我形は此内にあり此の度事大成功を期す御安心被下度候草々

五月一日

犬塚徳四郎様

御母様

其外様

犬塚太郎

一九〇

人間行爲の眞正動機

野村海軍少佐は小樽丸に指揮官として第三次の旅順閉塞に赴き、狂瀾怒濤敵彈雨下の間に於て其の身の行方不明となりし勇將なるが、其の發するに臨みて左の數言を識す、是れ氏が絶命の詞なり。

人に高尚純潔なる天職あるを忘る可らず惜閒す尙且偉なる人間行爲の眞正動機果して如何功名乎富貴乎將た悦樂乎否々眞摯の地と融化するの間に是あり

三十七年五月一日

〇〇に於て　野村勉識

好箇の死處

匝瑳海軍大尉は、日露戰端の開かれたるに際し、軍歌二篇を作り、浩歌して征途に上れり。其の歌左の如し

還遼十年薪に臥し
滅血十年膽を嘗む
吾年來の仇は誰ぞ
忠魂十萬長へに
恨を叫ぶ滿洲は
今將た誰の手に占むぞ
平和の名をば藉り來り
鴟梟の慾を滿しつゝ

一九一

道義の二字を標榜し
虐殺屠戮豺狼の

暴戻不仁の行ひは
抑も誰が業ぞ誰が國ぞ

堙垣壞れて卵室の
尊嚴如何で保つべき

天皇赫怒三軍の
貔貅は海に將た陸に

旗色堂々進み行く
王師の前に敵ありや

膺てや懲せや此時ぞ
正義の刀振り翳し

人道の鉾押つ取りて
尨大虚喝徒に

諸詐を弄せしロシヤ國を
膺ち懲してや下民の

恨を霽らせ仁義の師
冤ぞ

＊　＊　＊

偲ぶ十年の其昔
建てし功績は今も猶

吾人共に仰ぐなる
赤城の艦の名も高き

征露の師雲と湧き
旅順仁川數回の

勝利は他人に讓るとも
など此儘に終るべき

咬龍嘘く其時は
天地雲を呼ぶとかや

猛虎嘯く其時は
乾坤風を捲くとかや

彈丸は碎けて艦長の
血潮に染みし艦橋や

彈孔歷たる其軍艦旗は
赤城の艦の寶なれ

星は移りて乘る人の
名は異なれど眞心は

今も昔に劣りなき
精華合せて百餘人

劣勢艦と謂ふ勿れ
忠義に凝りし黑鐵の

心の楯は吾艦の
頼む武器なれなんのその

敵幾千の砲口も
敵幾百の水雷も

など恐るべき其昔
建し功績に耻かしや

見よ開戰の其時は
血汐は河と流るゝも
呼吸ある中は積年の
昔濺ぎし先人の
思ふも嬉し赤城艦
待てよ諸人諸共に
鷲の翼を打落し
暴虐非道のロシヤ國を
宸襟やすめまゐらせん

屍は山を築くとも
など退かん大丈夫の
仇に酬いん我彈丸を
血汐は吾を誘ふかと
腕鳴る時も今暫し
國に酬ゆる時はいま
旭の前の露の如と
打亡ぼして大君の
赤城の艦の名を擧げん

氏の第三次旅順閉塞の擧に加はるや、三河丸の指揮官となり、最も勇遙に奮進し、防材を破りて水道に闖入し、好個の位置に於て爆發沈沒した り氏の此の壯擧實行の途に上るに臨み、其の從兄杉浦琢磨吉氏に一片の訣別書を送れり。

小生も幸に今度好個の死處を得て報効之萬分一を盡さんと今將に其途に向ひ候元より萬生を期せず又何ぞ家事を顧みるの遑あらむやにて候只一死國に酬ひ魂は鬼となりて光明陸離たる邦家の前途を擁護せん事を期するのみに御座候

永訣に臨み貴下の萬福を祝し申候敬具

悲慘なる夢

第三回の旅順口閉塞の壯擧は、我が海軍の有爲なる將校の多くを失ひぬ而かも此の一行に在りて、無事歸艦したる武運強き將校あり、是れ即ち指揮官高柳大佐の戰死したる江戸丸に機關長たる與倉中機關士なり氏は此の逆捲く波と、十字の砲火との下を出て來りし後當時の光景

を家郷に報ぜり。

拝啓天佑の加護により再び茲に筆を取り本書差上候こは全く豫想外に御座候

江戸丸は新聞にて御覧被下候通り完全に港口の閉塞を遂げ爆沈仕候唯遺憾此上なく候は指揮官高柳大尉の戦死に有之候へども同君は其任務を充分遂げ方に投錨を令せんとする瞬時敵の巨彈の爲艦橋上に殪れられ候事にて戦死の狀況此上なく壯烈を極め申候

指揮官の外一等機關兵武藤彌七郎戦死致候他に二名の重傷一名の輕傷者を出し候のみにて他は悉く無事歸艦仕候

當時の事を追想致候へば凡てこれ一塲の悲慘なる夢と申候外無御座候到底筆舌の盡す能はざる處に有之候他日無事凱旋致候折も有之候節は萬々詳細可申述候

過般の書信中に申上候江戸丸の故の船長富川勝三郎君が過般大阪にて本船の○○○○致候砌り船體を撮寫被爲致候由に付右出來候へば好紀念と存候間恐縮に存候へども同氏に付二葉御購求被下一葉は東京へ一葉は何卒小弟へ御送り被下度奉願上候尙申上度事も山積致候へども茲に擱筆仕り候頓首

三十七年五月八日

守之助

御兄上様　御姉上様

二　伸

大尉の死體共十七名が商船の小さき端艇に乘り退却致候(端舟は合計四隻有之候ひしも他は悉く敵彈に破られ最小の一隻稍〻滿足なりしため)然るに端舟内に漏水甚だしく漸次沈下致候ひしは閉口仕候その内舟の右側前方に六寸許の彈孔あるを發見致候に付直に小

弟の引廻はしを以てこれに塡め四五名必死に海水をくみ出し候に追々〳〵減水致大に元氣回復致候其間にも敵は油斷なく探照燈を輝し陸上岸より端舟目掛けてマキシム砲ノルデン砲又は小銃等連續一齊射撃を加へ候ひしは驚入候然し幸に波浪甚だ高かりし爲(橈潴に)は此上なく困難なりしも時恰も引潮にて港外に向ひ海流有之候爲め大に助かり候()時々〳〵探照を脫し乘員は船共に一彈をも蒙らず無事一時間餘橈潴の後午前五時港外二浬位の處にて收容任務の水雷艇千鳥に發見收容被致候再び沖合にて九時頃淺間に移り其後春日丸及び赤城等に轉乘の上昨日午後漸く本艦に歸着致候艦員諸士の非常なる御好意を蒙り申候八隻の閉塞船中收容致され候は僅に三隻半分に不過他は全く其消息を知ず候卅名程は敵の捕虜と相成候と か申候が如何に候ものにや他は悉く戰死致候と存候

歸れば金鵄勳章

本田海軍少佐指揮官の下に港口防材に衝突して爆沈したる遠江丸の乘組中に、中村二等水兵と云ふものあり。氏の出征せんとするや『今度は暫く歸らぬが、歸れば金鵄勳章でも貰はねばならぬ』と幾度か繰り返して父母兄弟に訣別し去りしが、今や此の大業を遂行して身は亡き人の數に入りぬ。

拜啓前文御免下され度候扨不肖小生の如き者も帝國海軍軍人の一人に加られ候ことは小生身に取り大に幸福を喜び居り候處此度日露の件に付今は其軍人の國家に勤むる時と喜び出征仕りしより本日迄も度々海戰仕り候へ共今に之とて世人に知らるゝ如きはたらきも不仕候ことは實に小生我が身の不肖なることを思ひ日々心を

くるしめ居候此れとて世人に知らるゝ時も今迄は來らず候へ共未だ戰ひも三月や四月にて終ることゝて無之候へば其の內には必ず世人に知らるゝ如きことを一度は仕り度候夫れ軍人にして世人に知らるゝ如きことゝ仕るには我が一命は元より捨てゝ行かねば出來ず候ことにて小生が何時戰死の知らせ有之候とも必ず御なげき下されまじく候勝利を得て戰ひ終る迄は小生の身はなき者と思ひ下され度候餘は後便にて萬々申上候

四月

御母上樣　姉上樣

戰地軍艦やしま　中村市郎兵衛

一死以て成功を期す

手島二等機關兵曹は、第三回の旅順閉塞の際朝顏丸に乘組みて生死不明と註されたる一人なり。氏は熊本縣僊託郡八分字村の人、三十六年賜暇を以て郷里に歸りし時恰も日露の風雲急ならんとす。氏奮然腕を扼して兩親に向ひ、若し露國と戰端を開くに至らば、其の時こそは日本男兒の特色を現はし呉れんと言ひつゝ歸艦したるが、其の開戰に至りてより、家郷に寄せたる書信左の如し。

春暖之候何の御障りも無之御機嫌麗はしく御消光遊ばされ候御事と奉遙察候次に議事も御蔭を以て無恙艦務罷在候間他事ながら左樣御放念被下度其後は打絶而御無沙汰仕り何とも申譯も御座なく實は軍務多忙と申す程の事は御座なく候へども各地の戰況は私一よりも却て新聞紙上にて詳細に承知の筈所謂燈臺下暗し私等は只司令長官の公報によりて戰況を知るのみに御座候又本隊の行動は他日新しき事御報知致度も軍事上の秘密に屬するを以て部外に漏

ゝを嚴禁し有之且つ御報道致たくも部外の人には格別趣味も無之候へば態と差控申候段不悪御了察被下度本艦隊も早晩大活劇を新聞紙上二號活字にて公然御報仕るべく其節は是非とも戰死者棚か負傷者棚位には加はり度き覺悟に御座候

鋒とりて日々晛む露西亞の天

一日も早く行きたやモスコー府

臺灣の兄上には此頃久しく御無沙汰仕り御住所さへ不分明に御座候間御住所狀況等承知致し度八代の兄上にも御變りなく御精勵の御事と存候先は御安否御伺如斯に御座候

四月九日夕認む

はか留

父上樣　母上樣　お惠樣

時下不順の候母上樣には御保養專一に存候おケイ殿には三兄にな

り代り御孝養之れ祈る

決死隊に選拔せられて、旅順口に赴かんとする前夜本艦松島に在りて訣別の書を裁し、之れを家鄕に送りぬ。

今度第三回旅順口閉塞決死隊募集に相成候間平素の御敎訓又た議も身軍人の片割なれば　陛下の御厚恩に報するは此際なりと志願致し候處幸はひにして選拔御採用の榮を蒙り此の光榮なる閉塞の大責任を全身に荷ひ明日本艦退艦愈々閉塞船朝顏丸に乘組の筈此際に當り何も他に申し殘す事なし一死以て成功を期して國恩に報ず

御兩親樣兩兄上樣おケイ殿にも御自愛御保養を之れ祈る

終りに臨み　陛下の萬歲陸海軍萬歲を唱ふ　若し武運拙く戰死致すとも魂は永く露國の天に彷徨して帝國の大捷露國を撲滅せずん

ば決して地獄には行かぬ積り地獄に行つても幸ひに自ら習ひ覺えの腕あれば決して拙い事はせぬ積り幸ひに御安意を乞ふ先は出發の際に臨み取急ぎ御報知迄

第三回閉塞船第三號朝顏丸乘組　はかる

御兩親樣　兄上　おケイ樣へ

報國の誠思母の情

田中上等機關兵曹は、旅順第三次の閉塞の擧に參加し、朝顏丸に乘り組みて生死不明の中に數へられたる勇士なるが、氏は江州野洲郡の人、征途に在りて家鄉の知友に寄せたる書柬は左の如し。

一筆奉呈仕候陳者從來淺からぬ御厚誼に預り何れの日か報恩の微意を謝せんとするの念なきにあらざるも如何せん身は海上の浮木にして國家干城の大責任を有する軍籍の特に時局の此際如何ともなす能はざる次第に御座候いよ〳〵本艦も明九日午後當港出發致すべきに就ては本日は艦長以下六百五十有餘名は午後三時より艦內に於て出陣の首途を兼ね送別の宴を張る軍氣の振ふ事非常なり出發の際は豫て申上し通り愚女の身だけは御せわに預り度母は目下大阪の何れにあるや不分明なり愚妻儀は一時離別後何れにあるや不分明なり又長男名耀の京都にあるを聞くのみ吾戰死せば第一に貴下に宛てたる秘密書狀持參するものあり何卒よろしく御取計破下度候此秘密は唯今申上おきても宜敷候得共一家の家計上の事なれば暫らく不問に附す御推察の上御含みおき被下度實父死亡後家事整理の結果の詳細は右秘密書狀中に詳細申述おき候又我前途の方針も何れに

わりしやを推知することを得べくして母の保護にも難からずと信申候出征後戰場の働きについては御心配被下間敷候

八日　田中清三郎樣

御一同樣へよろしく貴下も御身御大切に御經過あらんことを望む

田中清之助

烈公の孫

蛤蟆塘の大激戰に於て華胄の出にして、曉勇絕倫終に敵彈に中り名譽の戰死を遂げたる陸軍步兵中尉松平恒吉氏は、子爵松平武修氏の令弟にして、父君は松平右近將監、母は老中堀田備中守正篤の女にして、實に水戶烈公の孫なりき。氏の學習院に在學中は俊才を以て聞え、特に選ばれて東宮に奉仕し、御學友たること歲あり。性溫良寡言にして能く部下を愛しぬ。我軍の鴨綠江に臨むや、氏は處々に轉戰し、九連城を陷れて追擊するや、敵を蛤蟆塘に窮迫し叱咤奮鬪して斃れぬ。氏の出征の命を受け帝都を發せんとするに臨みて、嬉しさの餘り令兄武修子に向ひ『予亦別に告ぐるの辭なし、只予痩腕ながらも四聯隊を脊負つて立ち、皇室の藩屛たるに背かざらんことを期す』と誓へりといふ。以てその勇敢なる名譽の戰死を遂ぐるに至れる、決して偶然にあらざるを知るべし。氏はまた平素優しくも、敵島の道に心を潛め、出征後四月八日令兄に宛て、

向島櫻の花の散りもせば
　此身の末と思ひ知られよ

との一首を送り、更に同月二十二日鴨綠江頭奮戰の前數日にして、令兄に寄せし書狀のうちにも、

君がためつくすわが身は山吹の

七重に八重に咲きて散らなん

とわりき思へばこれぞ中尉が絶筆なりける。氏の戰死するや、左の二通の通知書は松平家に來れり。氏が勇戰の狀眼前に見るが如し。

肅啓御勇健奉慶賀候陳者令弟松平恒吉君は去る一日戰鬪に於て御戰死を遂げられ候君が當日の戰狀は甚だ勇敢にして雨霰の如き敵砲彈の下に在て從容として毫も屈せず能く部下を指揮されたるは實に軍人の龜鑑に御座候且つ君の戰死は決して空しからず爲に部下の興奮する處となり能く敵を擊攘するに至りたる次第にして其效果誠に著敷儀に御座候右御戰死の狀況申述度如斯御座候　敬具

五月三日

近衛歩兵第四聯隊第三大隊長

飯島龜

拜啓春暖之候益御淸穆奉賀候陳者松平恒吉殿御事此回の戰役に就ては奮て御從軍被遊御出發後は殊に軍務に御精勵にて日夜寢食を忘れて部下の敎育訓練に盡瘁せられ不肖駿一の不才を輔翼せられ今日に至る迄當中隊をして大過なからしめしは偏に恒吉殿御精勵の賜と感佩致し候又去る四月廿六日我軍九連城攻擊準備として九里島攻擊を致し候際恒吉殿は元化洞附近の高地にて部下小隊を指揮せられ御奮鬪の後終に敵をして鴨綠江右岸に退却せしめ我軍を勇戰の結果と存じ候次で五月一日我軍總攻擊を實行致し終に九連城を陷落し恒吉殿は諸隊と共に敵を追擊し九連城の西北約二里なる蛤蟆塘の高地に達し部下の小隊を指揮せられ一層御勇敢の御奮鬪被遊候處同日午後四時卅分敵の砲彈連續に二發恒吉殿の胸部及

頭部に命中致し即時戰場に御斃れ被遊天晴御名譽なる戰死を遂げられ候は上下一同の齊く感惜措く能はざる處に御座候敵は殆ど全滅し數百の死傷者を遺棄して潰走致し候又恒吉殿始め我中隊の下士卒を死傷せしめたる大砲の全部並に數百挺の小銃は之を鹵獲し我軍の大勝に歸したるは偏に恒吉殿御奮闘の結果と堅く相信じ申候古來軍人の龜鑑と稱せられ居候も恒吉殿の軍務に御精勵戰闘に御勇猛なりし情況を見聞致し候得ば忸怩たらざるを得ざると存じ候定めて御戰死後に於ても御英靈は永く清韓の山河に留まり皇軍を庇護せられ終局の目的を貫徹せらるゝ事と信じ候玆に血涙を揮ひ恒吉殿の名譽なる御戰死の顚末を御通報するものに御座候中隊一同を代表し滿腔の熱情を以て哀悼の意を表し候恐惶謹言

五月二日

近衛歩兵第四聯隊第十一中隊

陸軍歩兵大尉　磯塚駿一

松平武修閣下

執事御中

氏が九連城蛤蟆塘の二役に佩用したる軍刀戰地より後送し來りて、松平家に到達したるが、刀身碧血を漲らし、劍鍔革鞘血痕未だ乾かざるに似たり、正に是れ丈夫心魂の凝結したるもの。

泣いて吳れるな

我が第二の上陸軍が遼東半島に上陸するや、鐵道破壞の任務を有する一支隊が、三十里堡の東北約一里半に在る龍口附近の敵兵を攻撃して、之を掃攘したり。此の戰に於て名譽の戰死を遂げたる第一は、桂陸軍中尉なりとす。氏は鹿兒島縣の人、未だ身を軍籍に入れざる時禪門の知識

狹野獨園氏に就て參禪し、大に得る處あり、之より性情一變し、沈著不動の人となりぬ。夫より螢雪の功を積みて士官學校に入り、兵學を講究し、出でゝ少尉となり、進んで中尉となるに至れり。氏はまた孝心深く、閑あれば卽ち書を寄せて父母弟妹を慰安し、俸給を割いて兩親に奉養する處あり。三月五日附を以て莫逆の友に送りし書柬は、氏が性情を知るべし。

泣てくれるな今船が出る烏泣さへ氣にかゝるサノサ、コーシツモン

昨今何を爲しつゝあるか、淀川神社の好意感謝の外なし、向ふ所は感天動地の快天地今やモヤ〳〵する呵々然し兎に角今度は毛唐の膺懲曾て演ぜし城山の稚事に比すれば尙易しよ、稍や壯快に云へば一死報國有「此時」なんど、無意識連は馬鹿に大袈裟に吹きたくりて天下あらゆる醜行至らざるなしぢやにい、然し身を國家に報ずる位は平凡の事よ男と生れて夫位の覺悟なくんば頓と始まらん一件で吾人昨今極めて平凡に生活して居る時々陽明學位をひねくりて消閑の一助に供して居る事よ多くの昆蟲が今生の遊納めとか何とか理屈をひねくりて平素の體度を全く破りたる景色見るも哀れの有樣なりよ、然し世人皆醉ふ我獨り醒たりでも餘り屈原の馬鹿氣取りに似て始まらぬから暫し口を結で三春を過さんにはよしなかりけりよ呵々、

コーシツモン昨今何シチヨルル今後如何なる事を仕出かすか見チヨレ、

貴兄より發する郵便も團隊號官姓名を明記して朱にて軍事郵便と明記すれば切手はいらぬソーナ

勇　喜

辰ゲどの

三月二十八日廣島より送りし書中には
露征伐は大概水上坂の兎狩位の事よ、青竹でたゝき散らして事足る、
原良原頭餞別の奇行尚記臆せるものゝ如しヤツモ今考へても隨分
間抜物呵々
小刀一本の活劇母に叱られし古事今昔の感何ぞ堪へん、
大阪にて遺墨帖に左の如く記せり

笑抛此殘骸
他日事によつたら貴覧に入るの時あらん乎呵々

桂蒼淵

所感

人生不保千歳生、　富貴畢竟一時榮、　爲事須爲稀代事、　取名宜取振古名、

敬根どん

等の事を記したりき。其の四月二十日出征の途に上らんとするや、家郷に向つて

此度は兼て希望の事とて勇氣百倍御推察被成下度最早申上ぐべき事も無之尚今後は屢々〳〵御安否伺ひ上候事は相叶間敷候間音信仕らざる間は極めて元氣活動するものと御安心被成下度候丈夫戰場に臨みて故郷に戀々たるが如きは從來の所信に背き候間此邊御推察奉願上候

と認め其奥に、

出發に際して
滿洲に散りにし花の色香をば

海原かけて送くれ春風
兼て敎育せし兵卒召集に應じて來營し
たる久振の嬉しさに
かゝれとて植にし園の櫻花
今日匂ふべき時は來にけり

此の封書到着の頃は小生の運命は或方面に向つて動きつゝある事と御察被下度他言を禁ず

とあり、此の高快なる靑年士官惜むべきかな、今や異鄕の土となり終んぬ。

戰死の快報

第二師團步兵第十九聯隊第三中隊小隊長なる託摩步兵少尉は、九連城の攻擊に於て奮鬪勇戰し、遂に敵彈の爲めに重傷を蒙り、敢なくも陣沒したるが、氏が戰鬪に臨む前日、一書を裁して慈母の許に寄せぬ。言々句々斷腸ならざるはなし。

謹啓其後は御無沙汰に打過ぎ甚だ申譯無之御海恕被下度候御地皆〳〵樣益々御壯健の趣き先日市村樣よりの御通知に依り了承仕欣喜に不堪候

小生其後は朝鮮を漸次北進し廿一日同國の最北極なる鴨綠江に到著仕候同江は河幅一里もある所の大河にして其の向ふ所山上には敵の大砲及び大兵占領致し居り候小生も此地著後略四日間前哨の最前方なる敵に最も接近し居る小哨の勤務を命ぜられ晝夜殆んど眠らず服務致し候此の時は小生朝鮮國上陸以來敵を實見せし初めに御座候著後既に此十日同江に架橋の準備其他攻擊の諸準備も

整へたれば愈々明拂曉を期し之を攻撃致す事に決定せられ候此の大戰闘の勝敗は取も直さず我國運を左右する者にて我々軍人の萬死以て之を擊退するを得ば以て我が軍人の任務を全ふせる者に御座候

小生の運命も明日を限りにて候へば小生戰死の快報に接し候節は充分の御滿足にて母上樣始め皆々樣の御悅顏を地下に於て拜し度候

小生茲に廿有五歲其の永年の間母上の膝下に於て實に御懇篤なる御養育を蒙り其の海山の御厚恩を未だ僅々に御報ひ奉りも申さゝる内に死するは甚だ申譯も無之候へ共小生今回の戰闘に於て戰死候節は之を以て御厚恩の萬分の一を御報ひ奉りたる者と御存じ被下度願上候

先づ〳〵皆々樣今後益々〳〵御壯健にて御消光遊され御家内益々〳〵繁榮遊ばされん事をのみ偏に祈上奉り候遙に故郷母上を拜し御別の爲め紙面を認むる事斯くの如くに御座候敬白

於龍山洞　二郎拜

四月廿九日

母上樣

千代、三郎殿も此後益々〳〵壯健御出世を祈候

雷轟擊定

雷轟電撃

仁川港外の海戰

九日正午露國軍艦「ワリヤーグ」及び「コレーツ」仁川港より出で來たる我が艦隊之れを八尾島以西に邀撃す砲戰三十五分の後ち彼は仁川港に退却せり午後四時卅分「コレーツ」は爆發し其後「ワリヤーグ」及び露國汽船「スンガリ」も破壞沈沒せり

我が艦隊は一人の死傷者なく艦體も損害なく軍氣大に振ふ(二月九日瓜生第二艦隊司令官報告)

旅順の海戰

聯合艦隊は去る六日佐世保を出發したる後總て豫定の如く行動し八日正午我が驅逐隊は旅順にある敵を攻撃せり當時敵艦隊の大部隊は旅順港外にありて我驅逐隊の水雷に掛りしもの少くとも「ポルタワ」形一隻巡洋艦「アスコリド」外二隻ありしものと認む我が艦隊は九日午前十時旅順口沖に達し正午より約四十分間港外に殘留せる敵艦を攻撃せり此攻撃の結果は未だ明瞭ならざるも敵に少からざる損害を與へ大に彼れが士氣を阻喪せしめたるものと信ず敵は漸次港内に逃走するもの〻如し午後一時戰闘を止め引上げたり此攻撃に於ける我艦隊の損害は輕少にして寸毫も戰闘力を減ぜず死傷は約五十八名にして内戰死四名負傷五十四なり仁川方面に向ひたる分遣艦隊の戰況は既に瓜生司令官より直接電報せるが如し我が驅逐隊は敵の砲火を冒して攻撃を果し其大部は既に本隊に合せり艦隊に御乘艦の各殿下は皆御無事なり我將卒一般の戰闘に從事せる狀況は頗る沈著にして恰も平常の演習に異らず戰闘後に於ける士氣は益〻旺盛にして若も擧動は愈〻沈著なり今朝來風波ありて艦船間の交通不通なる爲め未だ各艦よりの詳報に接せず不取敢右概況のみ報告す（二月十一日東郷聯合艦隊司令長官報告）

其二

二月十三日我が驅逐艦の一隊は大風雪を冒して旅順口に向ふ途上各艦見失ひて相分離せしも司令艇速鳥及朝霧のみ旅順口外に達し朝霧は十四日午前三時港口を偵察し熾んに陸岸砲臺及哨艇の砲火を被りしにも拘はず黒煙を揚げをる一軍艦に對し水雷を發射し且つ敵の哨艇を砲撃して無事歸り來れり速鳥は同日午前五時旅順口外に達し港

口に近接し敵の二艦を晴中に發見すると同時に其の砲火を受けたるも直に其の一軍艦に對し水雷を發射し其の爆發を確認して無事歸り來れり速鳥、朝霧の勇敢なる襲撃の効果は暗夜の爲め之れを知るに由しなしと雖も寡くも敵をして益〻戰慄せしむるの大功ありたるは疑なしと認む

備考　本驅逐隊の司令官は海軍中佐長井群吉、速鳥艦長は海軍少佐竹内次郎にして朝霧艦長は海軍少佐石川壽次郎なり

東郷聯合艦隊司令長官

其三　第一次閉塞運動

聯合艦隊は去二十日より豫定の行動を開始し途上天候不良の爲め行動を一日順延したる後二十二日より旅順口方面に進發し驅逐艦は二

十四日午前二時頃旅順口港外を捜索して「アムール」の如き敵の一軍艦を襲撃せしも其結果は明ならず又同日午前三時三十分我忠勇なる旅順口閉塞隊は敵の強力なる四ケ所の探海電燈と猛烈なる砲火を冒し旅順港口に猛進せしが天津丸は敵の探海電燈の爲に少しく針路を誤り老鐵山の東海岸に座礁し武揚丸は其外方約四百米突に自ら破壊沈沒し報國丸は進んで港口燈臺下に達して船首を約北々西にして自ら座礁し一隻(武州丸ならんか)は其南東微東二鏈半のところに是れ亦自ら破壊沈沒したり又他の一隻は(仁川丸ならんか)饅頭山下の海岸に座礁せるもの〻如し又勇敢なる我水雷艇隊は翌朝黎明迄港外に在り敵の砲火を冒して閉塞隊の收容に從事し前記沈沒船五隻にありし勇士を悉く收容し得たり旅順口閉塞隊及水雷艇隊の此勇敢なる行爲は能く帝國軍人の忠勇義烈を表明せるものにして港口閉塞の目的は不幸

にして完全に達する能はざりしと雖も其無形の効力莫大なるものあり と信す閉塞隊員中報國九の下士以下三名敵彈の爲めに輕傷を被りしも其他は皆無事なり又各水雷艇隊及驅逐隊にも一の損傷なし

我艦隊は二十四日午前十時旅順口沖に達し巡洋艦隊は直に港外を偵察して會々敵の旗艦「ノービック」及驅逐艦五隻が老鐵山の方より港内に入らんとするを發見し之を砲撃せり

二十四日夜我驅逐隊は三部隊に分れ其第一隊は鳩灣を第二隊は大連灣を捜索したるも敵を發見する能はざりし又第三隊は旅順港口外に て敵の砲火の下に一回の襲撃を試みたるも其効果は詳ならず

二十五日午前九時我艦隊は再び旅順口外に至り敵艦「バーヤン」「アスコリッド」「ノービック」の三艦港外に在るを見港内の間接射撃を兼ねて遠距離より敵の三艦を砲撃せり敵は要塞と協力して約二十分間應戰せしが須臾にして盡く港内に入れり依つて我艦隊は砲撃を止め港外を去れり此砲戰は距離稍〻遠かりしを以て其敵艦に對する効果は大ならざりしものと認む我艦隊亦一の損害死傷なし敵の運動に依り察するに彼は專ら我を要塞の十字砲火と水雷敷設内に誘致せんとするもの〻如し

主力艦隊の砲戰中我巡洋艦隊は港口の南方に於て敵を監視したるに老鐵山の南方より敵驅逐艦二隻の港口に入らんとするを發見し直に之を砲撃せしが其一隻は旅順口内に逃げ去りしも他の一隻を鳩灣迄追撃して終に之を撃破せり此驅逐艦は四本煙突のものにして鳩灣の北方に擱岸して我砲火の爲めに破壊せられたり

我巡洋艦隊の諸艦には別に損傷なし(二月廿七日東郷聯合艦隊司令長官報告)

其四

旅順口閉塞の結果に就き曩に其概要を報告したる處其後閉塞隊指揮官有馬良橘よりの報告に依れば武州丸は敵彈の爲め舵機を破壞せられ饅頭山下に擱岸し廣瀬武夫の指揮せる報國丸は殆んど港口に達したるとき其側に坐礁せる「レトウザン」より猛烈なる射撃を蒙ふり同じく舵機を破壞せられ且つ船首に火災を起し遂に燈臺下に擱岸沈沒せり又齋藤七五郎の指揮せる仁川丸も港口に入らんとするとき燈臺より南東約二鏈半の位置にて沈船と思はるゝものに觸抵し進行する能はずして其位置に爆發沈沒したるものなり右報國丸仁川丸の二隻は完全に港口を閉塞せざるも目的の一部は達し得たるものなり仁川丸閉塞隊員中二等機關兵楳原健三は沈置後端艇を卸さんとする際敵

彈の爲め戰死せり其他報國丸の下士卒三名輕傷したる外閉塞隊員は皆無事に我水雷艇隊に收容されたり勇敢なる閉塞隊員並に之れが收容に從事したる水雷艇隊等が天明に至る迄長時間敵の砲火を蒙りたるに拘らず斯の如く些少の死傷を以て生還したるは眞に奇異の現象にして一に大元帥陛下御威德の擁護に因るものと云ふの外なし

右前報告に洩れたるを以て更に報告す（三月三日東鄕聯合艦隊司令長官報告）

其五

聯合艦隊は豫定の如く行動して更に昨十日旅順口の敵を攻撃せり

驅逐隊の二隊は同日午前零時旅順口港外に達し港外を捜索して敵な

きを認め天明迄港外に留まりて乙驅逐隊は各所に特種の機械水雷を沈置せしが敵の要塞は之に對し時々砲撃したるも我驅逐隊は無事其目的を達するを得たり然るに午前四時三十分頃甲驅逐隊は老鐵山の南方に於て約六隻より成る敵の驅逐隊に會し近距離に於て約二十分間激戰し朝潮霞曉の三艦は敵の諸艦と殆んど肱々相摩せんとするが如く接戰し敵の三四艦に猛烈なる砲火を加へたるを以て敵は或は汽罐を破損し或は火災を起し或は悲鳴を揚げ多大の損害を負ふて敗走せり我三艦も亦敵彈の爲め多少の損害を被り死傷十五名内戰死下士卒七名負傷霞の大機關士南澤安雄の外下士卒七名ありたり就中曉は汽罐の補助汽管を破壞せられ一時漏汽したるが故に機關兵四名熱傷に依り戰死せり但各艦共に戰鬪航洵に支障あらず又乙驅逐隊は午前七時港外を去らんとする際偶々洋中より旅順口に入らんとする敵の

驅逐艦二隻を發見し直ちに其前路を遮りて之を攻撃し戰鬪約一時間多大の損害を加へたる後其一隻を逸したるも他の一隻「ステレグーシチー」號を撃破し敵の要塞砲火の下に於て漣は之を捕獲し曳航しつゝありしも漏水甚しく且つ波浪高く曳綱切斷せしを以て捕虜兵四名を收容して捕獲敵艦を放棄せり其後午前十時十五分に至り右「ステレグーシチー」號は全く沈沒せり

此戰鬪に於て乙驅逐隊の諸艦にも損傷ありしも多大ならず漣曙の二艦にも戰死卒二名負傷曙の少尉島祐吉外下士卒三名ありたり

之より先き敵艦「ノーウ非ツク」及び「バーヤン」は港外に出で來りて我乙驅逐隊に向ひ進航し來りしが我巡洋艦隊の港外に接近するを見て港内に退却せり

我主力艦隊及巡洋艦隊は同日午前八時旅順口沖に達し巡洋艦隊は直

に港口正面に進み我驅逐隊を掩護し次で主力艦隊亦老鐵山附近に至り午前十時より午後一時四十分迄連續港口に對し間接射撃を行へり

巡洋艦の一隊が港口正面より看的報告する所に依れば其彈著は概して良好にして其の効果少からざりしもの、如し我砲撃中敵の要塞も時々應戰したるも我艦隊の諸艦は一の損傷なかりし又巡洋艦の他の一隊は大連灣外に至り港口三山島に於ける敵の建設物を砲撃破壞せり又高砂千早は特に旅順口半島の西岸を索敵せしも敵を見ず前回の攻撃に於て我巡洋艦隊に撃破せられ鳩灣に擱岸したる敵の驅逐艦は「ウヌシーテリヌイ」にして今や檣及び煙突の上部を水面上に現はして沈沒し居れり

我各部隊は午後二時戰闘を止め且豫定地點に集合したる後引上げたり(三月十二日東鄉聯合艦隊司令長官報告)

聯合艦隊は豫定の如く行動し雨驅逐隊は二十一日夜より二十二日未明迄旅順口港外に在りて與へたる任務を遂行せり此間多少敵の砲火を蒙りしも別に損傷なし又本隊及び巡洋艦隊は二十二日午前八時旅順口沖に達し其一部を鳩灣の方向に遣はし富士、八島をして港内に對し間接射撃を行しめたり

此砲撃中敵艦は漸次に港外に出で來り午後二時過ぎ間接射撃を止むるの頃其數戰艦五隻巡洋艦四隻驅逐艦十隻となれり敵は終始砲臺下に運動し我を誘致せんとするものと認めたり又敵艦よりも間接射撃をなしたるものゝ如く特に富士の附近に著彈多かりしが一も損傷な

し

我各部隊は午後三時迄に港外を去り引上げたり(三月廿四日東郷聯合艦隊司令長官)

其七　第二次閉塞運動

聯合艦隊は去二十六日再び旅順口に向ひ同二十七日午前三時三十分敵港閉塞を決行せり四隻の閉塞隊は驅逐隊及水雷艇隊掩護の下に旅順口港外に達し敵の探海燈の照射を冒して港口に直進し約二海里に達する頃敵の發見するところとなり兩岸の要塞及哨艇より猛烈なる砲火を受けしも之に屈せず四隻相次で港口水道に闖入し第一の千代丸は黄金山の西側に於て海岸より一約半鏈の處に投錨爆沈し第二の福井丸は千代丸の左側を過て少しく前方に進み投錨せんとするとき敵驅逐艦より魚形水雷一發命中し次で其の位地に爆發沈沒し第三の彌彦丸も福井丸の左側に出で投錨爆沈せり第四の米山丸稍々後れて港口に達し敵の一驅逐艦の艦尾と衝突しながら既に沈沒せる千代丸と福井丸との間を通過し水道の中央に投錨せし時敵の魚形水雷一發を受け爆裂し惰力の爲め左岸に近く船首を左にして横に沈沒せり敵の猛烈なる砲火の下に於て斯の如く閉塞船が勇敢沈著其任務を遂行したるは事業として間然する所なく誠に賞讃するに餘りあり唯遺憾なるは彌彦丸と米山丸との間に尚ほ空隙を存し完全に通路を閉塞するを得ざりし一事なりとす此壯烈なる閉塞の再擧は前回之れに從事せし勇士の切願を容れ將校及機關士主として前回の者をして之に任せしめ下士以下のみは新志願者を以て交代せしめたり閉塞隊員中戰死中佐廣瀬武夫、兵曹長杉野孫七外下士卒二名、重傷中尉島田初藏、輕傷大尉正木義太大機關士栗田富太郎外下士卒六名にして其他は悉く無事

我が水雷艇驅逐隊に收容されたり戰死者中福井丸の廣瀨中佐及杉野兵曹長の最後は頗る壯烈にして同船の投錨せんとするや杉野兵曹長は爆發藥に點火する爲め船艙に下りし時敵の魚形水雷命中したるを以て遂に戰死せるものゝ如く廣瀨中佐は乘員を端舟に乘移らしめ杉野の兵曹長の見當らざる爲め自ら三たび船內を搜索したるも船體漸次に沈沒海水上甲板に達せるを以て止むを得ず端舟に下り本船を離れ敵彈の下を退却せる際一巨彈中佐の頭部を擊ち中佐の體は一片の肉塊を艇內に殘して海中に墜落したるものなり中佐は平時に於ても常に軍人の龜鑑たるのみならず其最後に於ても萬世不滅の好鑑を殘せる者と謂べし閉塞隊員の掩護收容に就ては直接其任に當りし水雷艇隊最も其力を盡し天明過ぐる迄敵の砲火に曝露して其任務を遂行せり就中蒼鷹燕の二艇は閉塞船隊を護衛して港口より約一海里に達し敵の驅逐艦一隻と會戰し多大の損害を加へ敵は汽鎚を破裂されたるもの〻如く盛に蒸汽を吹かしつゝ退却せり閉塞隊の端舟を港外に退却するとき目擊する所によれば敵艦と認むべきもの黃金山下に於て全く進退自由を失ひたるもの〻如くなりしと云ふ

我水雷艇隊驅逐隊は天明過ぐる迄熾なる敵の砲火を蒙りしに拘らず寸毫も損傷なし閉塞隊員の收容は千代丸及彌彥丸の乘員は燕に米山丸乘員は端舟三隻に分乘して鵠、雁に收容され福井丸の乘員は霞に收容されたり

「備考」閉塞隊を掩護したる驅逐隊及水雷艇隊は左の如し

驅逐隊　白雲、霞、朝潮、曉、雷、曙、朧、電、薄雲、漣、東雲

水雷艇隊　雁、蒼鷹、燕、鵠、眞鶴（東鄕聯合艦隊司令長官報告）

其八

聯合艦隊は去る十一日より豫定の如く行動し更に旅順口の敵に對して第八次の攻撃を爲せり第四驅逐隊第五驅逐隊第十四水雷艇隊及び蛟龍丸は十三日夜半旅順口港外に至り敵の探照を冒して港口に近づき計畫の通り港外の各所に機械水雷の迅速なる沈置を遂行し得たり又特別の任務を有せる第二驅逐隊は十三日黎明港外鮮生角の南東を巡邏せる時東方より旅順口に入らんとする四本煙突を有する敵の驅逐艦一隻を發見し直ちに其前路を遮りて之を攻撃し約十分間戰闘の後之を撃沈せり又同時頃西方老鐵山の方向より來れる他の敵驅逐艦一隻を發見し轉じて之を攻撃せしが距離遠くして遂に之を港口に逸せり此戰闘に於ける第二驅逐隊の損傷は輕微にして唯「電」の卒二名輕

傷せるのみ撃沈せる敵艦の溺者は敵艦「バヤーン」の近づき來りしため之を救助するの暇なかりし

第三戰隊は午前八時港外に達して第二驅逐隊を掩護し且つ敵情を偵察せり午前九時頃敵艦「バヤーン」我に向ひ突進し來り遠距離より砲撃を開始せしを以て徐々に應戰して之を撃退せり幾もなく敵艦「ノーヴゴロド」「アスコリド」「ディアナ」「ペトロパウロスク」「ポベーダ」「ポルタワ」等「バヤーン」と合し攻勢を取り反撃し來り第三戰隊之に應戰しつゝ敵を南東方向約十五浬里に誘致せり此時沖合約三十海里に方りて濛氣の内に隱れたる第一戰隊は第三戰隊の無線電信に接し直に急進し敵艦隊に逼りしが敵は艦首を轉じて港内に向ひ背進せしを以て尚益々追窮して之を港前に壓迫せる時先頭に占位せる「ペトロパウロスク」と見へたる敵艦一隻前夜沈置したる我機械水雷に掛り爆發轟沈するを

見る時に午前十時三十二分なり敵の殘艦は此慘憺たる光景に驚きて大に混亂し尚ほ外に一敵艦の進退自由を失ひたるの疑ありしも敵艦隊混雜の爲め其艦型を識別する能はざりし其後敵の殘艦は約一時間頻りに艦側附近の水面を砲撃しつゝ漸次に港内に入り正午過ぐる頃港外に敵影を見ざるに至れり此戰鬪の初期砲戰に於て第三戰隊は一の損傷なく敵の損害も亦少許なるべく第一戰隊は遂に敵と砲戰距離に近かざりし

當日午後一時艦隊は旅順口港外を去り豫定地點に集合して洋中に假泊し更に準備を整へて十四日午後四時より再び旅順口に向ひ發動せり第二驅逐隊、第四驅逐隊、第五驅逐隊、第九水雷艇隊は翌十五日午前三時前後相次で旅順口港外に達し豫定計畫の如く再び其任務を遂行せり午前七時第三戰隊も港外に現はれ敵情を偵察せしが港外に敵影なく港內寂然たり又第一戰隊は午前九時旅順口沖に至り途上浮流せる敵の機械水雷三個を發見し一々之れを砲撃爆沈し午前十時より春日進を老鐵山の西方に分派し約二時間港內に對し間接射撃を行はしめたり敵の要塞及港內の敵艦も時々之に應戰せしが兩艦共に損傷あらず此兩艦は此日を以て敵に對し其初彈を發射せしが其射撃の効果は相應に之れありしが如く老鐵山西の新造砲臺も沈默せしめたり午後一時三十分艦隊は交戰を止め歸航せり

此連續せる作戰に於て聯合艦隊が一兵をも失はずして多少の戰果を擧げ得たるものは一に大元帥陛下の御威德に依るものにして麾下將卒は終始勇往敢爲其の任務を遂行するに忠實なるも其奏功成果に至ては人力の及ばざる所多し特に多數の艦艇が晝夜を問はず敵機械水雷の浮流せる洋中を縱橫に航行し然かも今日に至るまで一の危害

を受けたることなきが如きは只天祐と確信するの外あらざるなり（四月十六日東郷聯合艦隊司令長官報告）

其九　第三次閉塞運動

聯合艦隊は豫定の如く行動し五月三日午前三時四時の交を以て旅順口第三次の閉塞を決行せり閉塞船隊及之を掩護せる赤城（艦長海軍中佐藤本秀四郎）鳥海（艦長代理海軍中佐岩村團次郎）第二驅逐隊（司令海軍中佐石田一郎）第三驅逐隊（司令海軍中佐土屋光金）第四驅逐隊（司令海軍中佐長井群吉）第五驅逐隊（司令海軍中佐眞野巖次郎）第九艇隊（司令海軍中佐矢島純吉）第十艇隊（司令海軍少佐大瀧道助）第十四艇隊（鵲眞鶴を缺き）第六十七號艇第七十號艇を加ふ司令海軍少佐櫻井吉丸は二日夕刻艦隊と分れ豫定航路を旅順口に向ひ前進せしが不幸にして午後十一時頃より南東の強風俄かに起り波濤高く爲めに閉塞船隊は離散し相失ふに至れり閉塞船隊の總指揮官海軍中佐林三子雄は船隊の集合到底見込なきを認め閉塞事業中止の命を下せしも其信號通達せず午前二時頃迄通信に盡力せる間に船隊は相前後して既に旅順口沖に達せり然るに三河丸（指揮官海軍大尉匝瑳胤次）は港外を偵察せる第十四艇隊に對する敵の砲火を見て前續船既に港口に突進せるものと思考し直に港口に向て邁進し佐倉丸（指揮官白石葭江）と思はしきもの之に續く敵は港口附近に敷設せる視發水雷を發火し強力なる探照と猛烈なる砲火とを以て之を防禦せしも三河丸は港口防材の一部を破りて奥深く水道に闖入し中央の好位置に投錨爆沈し佐倉丸と思はしきもの港口尖岩の附近に投錨沈沒す之に次て遠江丸（指揮官海軍少佐本田親民）江戸丸（指揮官高柳直夫）小樽丸（指揮官野村勉）相模丸（指揮官湯淺竹次

郎)愛國丸(指揮官海軍大尉犬塚太郎)朝顏丸(指揮官向菊太郎)も相次で港口に向ひ猛進す此時敵の防禦砲火猛烈を極め其敷設水雷は前後左右に爆發し閉塞隊員の戰死負傷するもの最も多かりしが遠江丸は港口防材に衝突し船首を東し殆んど港口の半部を閉塞して其位置に爆沈し江戸丸は港口に達し將に投錨せんとする際高柳指揮官は腹部を射られて戰死し指揮官附海軍中尉永田武次郎直に之に代り投錨を命じ次て爆沈せり小樽丸相摸丸と思はしきものも亦港口に入りて沈沒せるもの〻如く又愛國丸は港口より約五鏈のところに於て敷設水雷に罹り瞬時に沈沒し指揮官附内田弘、同機關長青木好次以下八名行衞不明となれり朝顏丸と思しきものは舵機を損じたるもの〻如く港口に達せずして遂に黃金山下に爆沈せり右八艘の閉塞船の五艘は港口に入りて爆沈せしを以て港口は少くとも巡洋艦以上の通航に對し充分閉塞せられたるものと認む

今次の閉塞事業は天候の異變と敵の防備增大したるとに依り前二回のものに比し頗る慘烈を極め戰死負傷は甚だ多く特に小樽丸、相摸丸、佐倉丸、朝顏丸四隻の閉塞隊員は一も收容する能はず其最後の勇行さへ之を知るに由なかりしは遺憾至極なりと雖も忠烈の事績は永く帝國の史乘に特記すべきものなりと信ず閉塞隊員の收容に從事したる各水雷艇隊及驅逐隊は翌朝まで風濤と戰ひ敵に抗して能く其任務を盡し特に水雷艇隊は港口に接近して閉塞隊員の約半部を收容せり此の難業中第六十七號艇(艇長海軍中尉平眞雄)は敵彈に汽管を破られ負傷卒三名を出し一時敵前に於て進退自由を失ひしが其の僚艇第七十號(艇長海軍大尉森本義寬)は之を救助して曳行せり又岩鷹司令兼艇長海軍中佐矢島純吉)も敵彈に舵機を傷けられ卒一名戰死し隼にては下

士一名戰死せり其他驅逐艦水雷艇には一も損傷なし

第三戰隊(司令官海軍少將出羽重遠)は三日午前六時第一戰隊(司令長官海軍中將東郷平八郎、司令官海軍少將梨羽時起)は午前九時旅順口港外に達して驅逐隊水雷艇隊を掩護集圍し午後四時まで各方面に分れて閉塞隊員捜索收容に盡力せしが終に得るところなかりし此日濛氣頗る深く爲めに敵狀を見ること能はず夜に入り我艦隊は各其集合地點に引上げ四日朝より更らに豫定の行動を續行せり(東郷聯合艦隊司令長官報告)

浦潮斯德の砲撃

豫定の如く六日朝結氷せる海を航し浦潮斯德東口に達せり敵艦軍港外に見えずバサルギン岬半島及ボスフォール海峽砲臺の射界を避けたる位置より北東陸岸砲臺下に接近し午後一時五十分より約四十分間間接射撃を以て港内に向ひ威嚇砲撃せし後引上げたり此砲撃は相應の効果ありしと信ず陸上砲臺には五時頃東口方向に當り黒煙の揚るを見る或は敵艦の出來りしが如くなりしも煙は次第に消滅し判明ならず七日朝亞米利加灣スツレローク灣を偵察せしも異狀なし正午再び浦潮斯德東口に迫りたるも敵艦見えず砲臺發砲せずそれより轉じてポシエット灣を偵察せしも敵なし右報告す(三月十日上村第二艦隊司令長官報告)

金州丸の遭難

陸海共同の下に於て歩兵第三十七聯隊第九中隊金州丸に乘組み咸興、利原を偵察し其任務を終へて元山へ歸航中新浦沖に於て敵艦の爲め

撃沈せられたり其顛末左の如し

救助船大西丸二十八日午後十一時十分元山港に著せり金州丸沈没の原因左の如し

四月二十五日午後六時三十分利原港を發し同十一時十五分新浦附近の沖に於いて敵の軍艦三、水雷艇二に逢遇し空砲を放ちたる故監督將校海軍少佐溝口武五郎飯田大主計船長八木政吉外一名は敵艦に行きたる儘歸らず敵は一時間の猶豫を與へ人員を收容せしと云ふ十二時頃には陸軍々人の外船中殆ど人なきが如し陸軍々人は士官の命により甲板上に出でずして沈靜す午前(廿六日)一時卅分頃敵は水雷を發射し且爆發藥を裝置して爆發せるが如し其水雷は船室を貫く是に於て陸軍兵は甲板に上り敵に對し數列にて急射擊を爲す敵は之に對し砲撃し我兵死する者多し此間曹長は甲板の上にて指揮し下士以下にも亦自殺せる者多し午前二時頃敵は第二の水雷を發射す是に於て金州丸は機關部より二個に破壞せられ水中に陷沒す甲板に在りて射撃せし者は一旦水中に巻き込まれしも再び水面に浮き上りし者ありて其者は恰も其上面に在りし端舟に乘り移り繩を切斷して漂流し水は屢々端艇を浸し將さに沈沒せんとせしを以て重量物を放棄し僅に浮游するを得たり其後力を極めて西に向け漕ぎ廿六日午後五時三十分下士以下三十七名馬養島に著又た他の端艇にて卒八名はガイヨウカシに廿七日正午過ぎに著き其後共に新浦に集る人夫六、商人三は水雷を發射せられざる以前に於て遁れシヤ」號に收容せられたるもの、如し海軍兵は端艇にて多くの人夫傭人は敵艦ロも其後不明なり

陸軍々人は一人も敵に捕はれしものなく生存者の外は悉く戰死せり

實に其最後は天晴にして一も非難すべきものなし特に此困難の際武器を携へて歸りし者五名あり戰死せし陸兵は大尉椎名三藏、櫻井久我治、中尉寺田龜之助、横田信三、少尉檜垣正和、特務曹長鷲康勝、士卒七十三、通譯二、他は陸兵にあらずして不明、生存陸軍々人中輕傷十稍重傷一、商人、人夫には傷者なし(四月廿九日大本營著電)

定州の占領

二十八日午前十一時十五分定州南門外に於て我が騎兵隊の將校斥候敵に遭遇し該隊及歩兵の一部は之を收容し結局此敵を擊退して定州を占領し　陛下の萬歳を唱へ士氣極めて旺盛なり

將校斥候は定州南門附近にある敵の射擊を受け北方に避け騎兵の主力之を收容する爲め全力を盡して射擊す午後一時十五分我歩兵は急行して定州東北約二千メートルの地に來りて射擊するや敵は義州街道郭山街道を退却す我歩騎兵の一部は之を追擊す敵の兵力は約六百なり

此の戰鬪に於て受けたる我損害は左の如し

戰死者　中尉　加納忠男　特務曹長　清末廣吉下士以下三名

負傷者　大尉　黒川敬藏(兩臀貫通、銃創)

中尉　幸村銀吉(右腿貫通銃創)下士以下十名

歩兵隊には一の死傷なし

馬匹　死一　傷七

戰場に遺棄せし敵の死者二(下士一)なるも土人の言に依れば城内に在りし死者のみにても七八名あり敵は巧に馬背及擔架に依りて死傷者を運搬し去れり現に將校らしき者二名の斃れたるを擔架に依りて危

険を犯しつゝ運び去るを見たり
此他血染の繃帶の處々に散在しあるを見れば敵は少くも我れと同等
の損害を受けたるならん(三月廿八日着電)

鴨綠江畔の戰

架橋準備を爲すの必要上軍は廿六日朝威力を以て即ち近衛師團の一部を以て九里島の敵を擊退して之を占領し第二師團の一部を以て黔定島を占領せり敵は悉く九連城方向に敗退せり此戰鬪により我死傷者近衛師團戰死(一字不明)重傷九、輕傷十六名、第二師團死傷なし又敵は少からざる死傷者を運搬し去るを見たり但し我衛生隊に收容したる敵の重傷者(乘馬斥候兵)一は東部西伯利狙撃歩兵第二十二聯隊のものにして同人の言によれば同第廿三、狙撃第廿四聯隊も又前面にあり其長官は少將ツルメフにして各聯隊は二大隊より成り乘馬斥候兵百四十二を有す敵は九連城後方高地にある砲八門(九サンチ半)を以て西湖洞附近を射撃せり又虎山の高地に「ホッチキス」機砲二門を現せり元化洞高地にありし我砲兵一中隊は虎山の高地に現はれたる敵の高等司令部らしきものに對し三回の一齊射撃を行ひしのみ

廿六日正午頃より九連城の砲兵は義州附近を砲撃し近衛歩兵第一聯隊の兵卒二榴散彈の爲め負傷せり廿七日も亦時々砲撃す我砲兵は應射せず

九里島にありし第二十二聯隊乘馬斥候部隊長少尉セミヨーノナの死體を九里島對岸にて發見し義州城内に埋葬せり

細谷艦隊より派遣したる宇治艦長の二砲艦二水雷艇二武裝蒸汽船は中川海軍中佐の指揮の下に廿五日夕龍巖浦に入港せり其際宇治は安

子山より敵の砲撃を受けたり廿六日朝水雷艇一小蒸汽艇一は水深測量の爲娘娘城附近に進航せり艦隊は午後五時より同五十分迄安子山の敵と對戰し敵砲を沈默せしむ又其附近を通航する敵騎百を砲撃せり海軍は損傷なし

敵は鑿河右岸に添ひ九連城以北に工事を繼續しつゝあり廿八日も亦時々砲撃しつゝあり廿六日九里島對岸に於て斃れたる敵の馬四九十五頭外に生馬六頭を得たり

昨二十八日近衛第四聯隊の二中隊は偵察の爲め虎山に至り更に一小隊を栗子園に派遣す敵約三十同村の南端を防禦す我兵之を撃退す敵は死者五名を殘せり其隊號は狙撃歩兵第廿二聯隊なり此時敵は楡樹溝東南端高地の砲臺より砲撃を始む我に損害なし九連城附近の敵の砲兵は時々大角度の射撃を行ひ彈丸は九里島、義州、西湖洞、弘北洞、西

方附近に落著し我攻撃準備作業を妨害し夜間と雖も時々發砲す然れども此効力は概して微弱なるもの、如く我に損害なし廿九日も時々義州城内を砲撃す我は應射せず第十二師團は水溝鎮の前岸にありし微弱の敵を擊攘し今廿九日午後二時架橋を開始す

一、第十二師團は今朝午前三時水口鎮に於ける架橋完成續て渡河午後六時豫定の陣地に著く午前

二、野戰砲兵第一聯隊及重砲兵聯隊は未明迄に豫定の陣地に著く午前十時四十分點定島より中江臺に出したる我歩兵斥候に對し九連城北方及東方高地にある敵の砲兵之に向て射撃したるを端緒とし猛烈なる砲戰を開ける午前十一時十五分九連城の敵砲兵は沈默す馬溝東方の高地にある敵の砲約八門は九里島西方の架橋點に向ひ射撃を續行せり我が義州東方に布置せる近衛砲兵之に應ず約十分の

後馬溝東方の敵砲兵亦沈默す午後零時半兩方面の敵砲兵再び射撃を開始せしも我射撃の爲一時二十分頃再び沈默せり

我砲撃の結果敵に充分なる損害を與へたるものと認む我軍の損害は輕傷將校五、下士以下卽死二、負傷廿二なり

三、鴨綠江本流の架橋は午後八時完成し諸隊は續々虎山北方の高地に前進す

四、細谷艦隊の枝隊は安東縣に於て戰鬪に參與し就中裝砲汽艇は敵の砲兵及歩騎兵と最も激烈なる戰鬪をなし歩騎兵約四百を撃退せり

五、軍は豫定の如く明一日未明砲撃を實行せんとす

六、敵の砲兵は發射速度大にして其の洩火彈は確實に七千五百米突以上に達す(四月三十日黑木陸軍大將報告)

九連城の占領

敵は九連城西北高地に於て再び抵抗を試みしも午後一時五十分より退却を始め軍の右翼隊(第十二師團)は大樓房中央隊(近衛師團)は蛤蟆塘左翼隊(第二師團)は安東縣に向ひ又軍の總豫備隊は遼陽街道に前進し午後六時軍は安東縣より老古溝を經て梨樹溝に亘る線を占領し特に蛤蟆塘附近にて三面より敵を包圍し激烈なる戰鬪の後砲廿門馬匹車輛共悉皆將校廿餘名下士卒多數を捕虜となせり

我に對せし敵は狙撃歩兵第三師團の全部及び同第六師團の第二十二第二十四聯隊とミシチェンコの騎兵旅團砲約四十門機關砲八門にして鳳凰城方向に背走せり我軍の死傷は多くも將校以下七百ならん目下取調中

戰利品速射砲廿八門小銃及彈藥等多數なり

我砲兵の効力は頗る偉大にして捕虜將校の言に據れば昨今兩日の戰に於て敵の軍團長ザスリツヂ師團長カシタリンスキーは共に負傷し其他捕虜騎兵中佐の言に據れば敵の死傷は八百以上なりと云ふ摩耶艦隊は午前十時より安東縣下流に至り敵の砲兵と約三十五分激戰の後之れを退却せしめ午後二時龍岩浦に歸れり

當軍司令部は午後五時卅分九連城に到る

殿下以下各將校極めて元氣軍隊の士氣大に振ふ

以上不取敢報告す(五月一日黑木陸軍大將報告)

海軍の合同砲撃

中川摩耶艦長より左の電報に接す

分遣隊は一日午前九時半出港出來得る限り上流に溯航し摩耶艦は安子山方面宇治は六道溝附近の威嚇砲撃をなす水雷艇は四道溝附近に溯航威嚇砲撃の後歸航する際安子山北東の山腹より不意に劇烈なる砲隊の射撃を受く應戰約三十分にして敵を沈默せしめ午前十一時半龍巖浦に歸著せり我損傷なし裝砲汽艇は昨夜午時十時出港四道溝の上流に至り約三十分威嚇砲撃を行ふ敵之に應戰せり翌午前一時歸港す

本日午前八時三十分出港安東縣下流に至り敵の歩兵及砲兵と約三十五分劇戰の後敵を退却せしめ安東縣市街に火災起るを認め午後二時歸港せり我に損傷なし

土人の言によれば敵は安東縣市街に放火し退却せる者の如し

軍は本日午前九連城附近を占領せり(五月二日細谷第三艦隊司令官報

告)

占領後の追撃

昨一日午後敵は我が追撃に對し頗る勇敢の抵抗をなし爲めに我軍の死傷は更に三百を加へたり又此敵は最終の時期に至る迄奮戰し其砲兵約二中隊は人馬の大半を失ひ終に閉鎖機の要部を破壞し白旗を揚げ降服せり捕虜將校の確言に依れば蛤蟆塘附近の戰鬪に於て師團長カシタリンスキー及狙撃歩兵第十一、第十二聯隊長、狙撃砲兵大隊長は戰死し其他高級將校に死傷多し敵は數回の打撃に依りて全く潰亂して退却せしものゝ如く昨夜來各所に逃竄し在りたる敵の投降するもの多く捕虜の總數今や將校ロウエフスキー中佐以下約三十内健康者二百其の詳細及我軍死傷者の姓名確報は十下士以下約三百内健康者二百其の詳細及我軍死傷者の姓名確報は取調中(五月二日黒木陸軍大將報告)

湯山城の追撃

昨三日我騎兵將校斥候(田上中尉以下十四名)は湯山城に達せし時同地南方高地に在る敵の騎兵十五六名より射撃を受けたるを以て直に其の背後に迂回し之を襲撃し激烈なる格闘の後鳳凰城方向に撃退し猶ほ之を追撃して高麗門東南約一里に在る涸川の線に達す此時敵の監視兵街道兩側の高地に在るを認めたり

土人の言に依れば五月一日湯山城東方高地に在りし敵の歩兵約二千は東南方より退却し來る味方の歩兵約三百を誤認して同志打を始め爲に死者百十傷者七十を生じ又た輜重車は積載品を放棄して潰走せりと

捕虜將校の言に依れば五月一日の戰鬪に於て隊伍を整へ退却せしものは僅に歩兵五、六大隊砲兵二中隊のみ其他は悉く潰走せりと(五月四日黒木大將報告)

鳳凰城の占領

一、五月六日我騎兵斥候は鳳凰城東北に於て敵の騎兵を襲撃し死者三名負傷者數名を生ぜしめたり

二、同日又た我騎兵は二台子、三台子、四台子の敵を撃退し歩兵の一部隊を以て鳳凰城を占領せり報告に依れば遼陽街道沿道の家屋は多くは燒失せられたり

三、敵の退却途上に人馬逃走したる衛生材料遺棄しありたる以て之を當軍に收容し彼我傷者の治療に使用し又た敵の衛生部員數名は其の希望に依り之を敵傷者の救護に使用せり

四、敵は鳳凰城退却の際彈藥庫火藥庫を燒きたり七日に至るも森林及び村落内等より出で來り我に投降する敵の敗殘兵續々として絶へず又た敵自ら埋葬したる墓地も尠からず土人の言に依れば去る二日擔架にて鳳凰城を通過せし敵の負傷者は約八百なりしと之に依りて見れば敵の損害は確に三千以上なりしならん(黒木陸軍大將報告)

明治三十七年六月七日印刷
明治三十七年六月十日發行

不許複製

忠烈餘芳奥附
定價金參拾錢

編纂者　東京市麹町區隼町十六番地　吉田宇之助
發行者　東京市京橋區日吉町四番地　渡邊爲藏
印刷者　東京市京橋區日吉町四番地　齋藤剛
印刷所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社
發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

民友社出版書籍目錄

（明治卅七年五月改正）

（一）本社書籍は全國各賣捌店にて賣捌致候若し賣捌店に於て天災地變なくして賣捌かざる時は本社發送を怠るに非らずして其賣捌店に何等かの事故ありて發送を受け能はざるものと知らるべし

（二）斯る場合には本社へ前金を以て注文せらるれば必ず迅速に發送すべし

（三）注文は書名を明瞭に記送さるべし上、中、下又は第一第二等ある書籍は落ちなく之を記別せらるべし

《明治二十年二月創立》

東京市京橋區日吉町四番地
民友社
電話新橋二八五〇番

再版

千代のひかり

定價 五十錢
郵稅共

右は　天皇陛下御製　皇后陛下御歌を世にもめでたき久我從一位東久世樞密院副議長の筆蹟其儘緻緒巧なる木版に彫刻し特別なる技術を以て上等美濃紙六十頁に印刷し劍本清雅高尚にして最に國民の一本を珍藏す可き稀品也

東京市京橋區日吉町四番地　國民新聞社

德富猪一郎著

國民叢書

◎第四日曜講壇
◎近時政局史論
◎第三日曜講壇
◎第二日曜講壇
◎教育と宗教
◎人物世界
◎處世訓
◎日曜講壇
◎生活と人物
◎社會と人間

◎世間と人
◎漫興
◎文學雜記
◎寸鐵漫錄
◎單刀直入
◎世間小景
◎家庭小話
◎風雲漫錄
◎第二靜思餘錄
◎天然と人生
◎文學と斷片
◎靜思餘錄

各上下
郵税定價二十四錢
郵税定價二十五錢
郵税定價二十錢
郵税定價二十四錢
郵税定價二十五錢
郵税定價二十錢
郵税定價二十五錢
郵税定價二十錢
郵税定價二十五錢
郵税定價二十錢
郵税定價二十五錢
郵税定價二十四錢
郵税定價二十五錢
郵税定價二十錢
郵税定價二十四錢
郵税定價二十五錢

◎青年と教育　定價四十二錢　郵稅二錢

◎人物管見　定價四十二錢　郵稅二錢

◎進歩乎退歩乎　定價四十二錢　郵稅二錢

蘇峰雜著

◎吉田松陰（肖像入）　定價五十錢　郵稅六錢

◎新日本之青年　定價二十四錢　郵稅二錢

◎日本之青年（德富猪一郎編纂久保田米僊畫誕生）　定價二十錢　郵稅二錢

蘆花生編著

◎青蘆の出（小說）　定價二十五錢　郵稅二錢

◎自然と人（小說）　定價十四錢　郵稅一錢

◎不如歸（小說）　定價上製三十五錢　郵稅三錢

◎外交奇異（世界古今）　定價十六錢　郵稅一錢

◎探偵婦（名）　定價十五錢　郵稅一錢

◎青山白雲（近世歐米）　定價四十五錢　郵稅四錢

◎歷史の片影　定價上製一圓六十錢　郵稅十六錢

櫻痴居士著

◎集記生歸譚聞鑑雲影　定價二十錢　郵稅二錢

◎幕末政治家　定價四十五錢　郵稅三十錢
◎懷往事談　定價二十四錢　郵稅四十錢
◎幕府衰亡論　定價三十六錢　郵稅三十五錢

時務叢書

◎海軍擴張論　定價二十五錢　郵稅二十錢
◎國民と財政　定價二十四錢　郵稅四十五錢
◎時務一人物　定價二十八錢　郵稅二十錢
◎二十世紀新三十論　定價二十錢　郵稅二十錢
◎近時の外交　定價四十五錢　郵稅二十五錢

家庭科學

塚越停春著

◎第一編　動物のはなし　定價十四錢　郵稅十五錢
◎第二編　天文のはなし　定價二十錢　郵稅十二錢
◎第三編　植物のはなし　定價十四錢　郵稅十五錢
◎第四編　地文のはなし　定價十四錢　郵稅十五錢
◎第五編　鑛物のはなし　定價十四錢　郵稅十五錢
◎第六編　天氣の話　定價十四錢　郵稅十五錢

教育叢書

教育書類

◎第一卷 家庭小話 定價四十八錢 郵稅十錢
◎第二卷 齊家訓 定價四十二錢 郵稅十錢
◎第三卷 國民と時勢 定價二十五錢 郵稅二錢
◎第四卷 地理と人事 定價四十二錢 郵稅二錢
◎第五卷 風土と人情 定價四十二錢 郵稅二錢
◎第六卷 時務的教育 定價四十八錢 郵稅二錢
◎第七卷 新國民の資格 定價四十二錢 郵稅二錢
◎第八卷 濟民論 定價四十二錢 郵稅二錢

◎柴田一郎著 實踐德育論 定價四十四錢 郵稅二錢
◎浮田和民著 國民教育論 定價四十三錢 郵稅二錢
◎浮田和民著 帝國主義と教育 定價四十二錢 郵稅二錢
◎塚越芳太郎著 成功立身 定價二十六錢 郵稅二錢
◎山路愛山著 修養論 定價三十二錢 郵稅二錢
◎蘇國大學教授ジョン、アラッキー著 青年修養錄 定價五十錢 郵稅五錢
◎愛媛縣士族中一良譯 進化論 定價四十四錢 郵稅二錢

式典書類

◎土方伯、田中子爵題辭 內外新禮式 定價三十五錢 郵稅四錢
◎平田久編纂 交際儀式略 定價一圓 郵稅四錢
◎宮內大臣題辭 宮中儀式 定價三圓 郵稅三十五錢
◎平田久編纂

十二文豪

◎塚越芳太郎著　第一號外　柿本人麿及其時代

◎濱田佳澄著　第二號外　シエレー

◎米田實著　第三號外　バイロン

◎緒方維章著　第四號外　シルレル

◎號外　ジヨン

◎第一卷　カーライル

◎竹越與三郎著　第二卷　マコウレー

◎山路愛山著　第三卷　荻生徂徠

◎宮崎八百吉著　第四卷　ヲルヅヲルスイ

◎高木伊作著　第五卷　グーテ

定價四十三錢　郵稅四十錢

定價四十二錢　郵稅四十五錢

定價四十二錢　郵稅四十五錢

定價四十二錢　郵稅四十五錢

定價四十二錢　郵稅四十五錢

定價四十二錢　郵稅四十五錢

定價四十二錢　郵稅四十五錢

定價四十二錢　郵稅四十五錢

◎北村門太郎著　第六卷　エマルソン

◎塚越芳太郎著　第七卷　近松門左衛門

◎山路愛山著　第八卷　新井白石

◎入見一太郎著　第九卷　ユーゴー

◎德富健次郎著　第十卷　トルストイ

◎森田思軒遺著　德富蘇峰山路愛山校定　第十一卷　賴山陽及其時代

◎塚越芳太郎著　第十二卷　瀧澤馬琴

定價十八錢　郵稅四十錢

定價十八錢　郵稅四十錢

定價十八錢　郵稅四十錢

定價十八錢　郵稅四十錢

定價三十錢　郵稅六十錢

定價二十錢　郵稅四十錢

定價一圓　郵稅八十錢

定價五十錢　郵稅六十錢

傳記類

◎吉田宇之助著　王安石

◎伊達稚堂千葉紫草合著　ゴルキー

定價三十五錢　郵稅六十錢

定價二十五錢　郵稅四十錢

◎民友社編纂 **民友記事文** 定價四十八錢 郵稅二十錢

◎櫻主人署 **野中兼山** 吉田宇之助著 定價四十錢 郵稅二十錢

◎信周署 **西太后** 中久喜 定價二十錢 郵稅二錢

◎民友社編纂 **勝海舟** 定價五十錢 郵稅六錢

◎太郎署 **熊澤蕃山** 塚越芳 定價八十錢 郵稅八錢

◎**將軍の半面**（モルトケ將軍の文章及議論） 定價四十五錢 郵稅二十錢

◎**森有禮** 定價二十錢 郵稅二錢

◎角田柳作著 **井原西鶴** 幸田露伴序 定價四十錢 郵稅二十錢

◎**雲井龍雄** 定價二十錢 郵稅二錢

◎**詩人行**（口繪入） 定價二十錢 郵稅二錢

◎枝著 **阪本龍馬**（題字肖像手蹟入） 弘松宣 定價十五錢 郵稅四錢

◎民友社編纂 **征清壯烈談** 定價二十錢 郵稅二錢

◎**鐵道王グルード** 定價十五錢 郵稅二錢

◎**山縣有朋**（附渡邊國武岡本柳之助） 定價十五錢 郵稅二錢

◎**兩ケ月ロンドン** 定價二十錢 郵稅二錢

◎**リンコルン**（下卷） 定價二十錢 郵稅二錢

◎**ソールズベリー** 定價二十錢 郵稅二錢

◎**エリオット** 定價二十錢 郵稅二錢

◎**ウエリントン** 定價二十錢 郵稅二錢

◎**吉田松陰文** 定價二十五錢 郵稅二錢

家庭叢書

◎第一卷 家庭の和樂 定價二十錢 郵稅二十錢
◎第二卷 夏の家庭遊戲 定價二十錢 郵稅二十錢
◎第三卷 玩具と遊育 定價二十錢 郵稅二十錢
◎第四卷 家庭教育 定價二十錢 郵稅二十錢
◎第五卷 小兒養生 定價二十錢 郵稅二十錢
◎第六卷 家庭衛理 定價二十錢 郵稅二十錢
◎第七卷 家政整理 定價二十錢 郵稅二十錢
◎第八卷 簡易料理 定價二十錢 郵稅二十錢
◎第九卷 社交一斑 定價二十錢 郵稅二十錢
◎第十卷 婦人と職業 定價二十錢 郵稅二十錢

十四

◎號外 家庭理財 定價二十錢 郵稅二十錢
◎號外 名士と家庭 定價二十錢 郵稅二十錢
◎號外 紫式部言 定價二十五錢 郵稅二十二錢
◎號外 清少納言 定價二十三錢 郵稅二十二錢

娛樂書類

◎嘉納治五郎序 村田栴著 水泳術指南 定價上製三十五錢並製三十錢 郵稅上製六錢並製四錢
◎守山恒太郎著 野球之友 定價三十錢 郵稅四錢
◎名人小野五平編纂 將棋秘訣 定價三十錢 郵稅四錢

十五

小說類

◎溫亭生著　二年

◎富永蒋江生著　荒

◎山路愛山著　懺

◎富永蒋江生稿『ロモラ』エリオツト著の梗概　雪崩と百合

◎溫亭主人作　不知火

◎第五國民小說　越磯

◎第六國民小說　悔

◎第七國民小說　火

定價四十錢　郵稅二十錢
定價四十二錢　郵稅二十五錢
定價四十二錢　郵稅二十錢
定價四十二錢　郵稅二十錢
定價四十二錢　郵稅二十錢
定價四十二錢　郵稅二十錢
定價四十四錢　郵稅十五錢

◎第八國民小說　水

◎堀内新泉著　行雲流

◎惠磨遜の書簡

◎國木田獨歩著　武藏野

◎千葉紫草著　笑魔

◎日本文學梗概

◎巢林子戲曲　上下各

◎名家紀行文選

定價四十錢　郵稅二十錢
定價四十二錢　郵稅二十錢
定價四十二錢　郵稅二十四錢
定價四十二錢　郵稅二十錢
定價四十二錢　郵稅二十錢
定價四十二錢　郵稅二十錢
定價四十六錢　郵稅三十錢

◎今世名家文鈔　森田思軒重譯　定價二十錢　郵稅四錢

◎ユーゴー小品　ヴヰクトル、ユーゴー著　森田思軒重譯　定價三十五錢　郵稅六錢

◎懷舊　湖處子　宮崎八百吉著　定價二十五錢　郵稅四錢

◎歸省　正岡子規君閲並序　下村爲山君題　高浜虚子君序　上原三川君　河東碧梧桐君序　直野碧玲瓏君　共編挿繪四季三十餘　定價十五錢　郵稅四錢

◎新俳句　歐文對照　定價三十五錢　郵稅六錢

◎一語千金　定價二十錢　郵稅二錢

◎一語千金　定價二十錢　郵稅二錢

歷史類

◎日露外交十年史　德富猪一郎序　濱田佳澄著　定價五十錢　郵稅八錢

◎近時外交史　武田源次郎著　定價二十五錢　郵稅四錢

◎佛蘭西第二帝政時代　野々村十九世蘆舟著紀史　定價二十五錢　郵稅四錢

◎革命時代　野々村十九世蘆舟著紀史　定價三十錢　郵稅四錢

◎反動時代　野々村十九世蘆舟著紀史　定價二十錢　郵稅四錢

◎疑史（德川家康事蹟）　重野（博士）成齋序　關軒村岡素一郎著　定價二十五錢　郵稅四錢

◎讀史餘錄　山東樵越芳太郎著　定價四十錢　郵稅六錢

◎外交史　平田久著　定價五十錢　郵稅六錢

◎十九世紀外交突史　波多野修次郎著　定價二十五錢　郵稅四錢

◎內政外教衝突史

世界國勢書類

◎外務次官珍田捨巳序 外務省編纂 **西伯利亞及滿洲**
定價十一錢 郵稅一錢

◎後藤新平序 田原禎次郎譯述 **露國の闇黑面**
定價八十錢 郵稅五錢

◎中四牛郎譯 **俄國如是**
定價八十錢 郵稅五錢

◎外務省調査 **最新日清韓露地圖**
定價八十錢 郵稅五錢

◎井上雅二著 **中央亞細亞旅行記** 兒玉臺灣總督序、後藤民政長官序、福島陸軍少將書簡 德富蘇峰序、家永豐吉著
定價二十錢 郵稅二錢

◎**西亞細亞旅行記** (地圖及插畫數種)
定價十六錢 郵稅一錢

◎露國政府編纂 日本民友社譯述 **露國事情**
定價三十錢 郵稅四錢

◎平田久著 **露西亞**
定價三十五錢 郵稅六錢

◎民友社編纂 **支那及支那人**
定價四十錢 郵稅六錢

◎國民新聞社編纂 **帝國列國便覽**
定價二十錢 郵稅二錢

◎民友社編纂 **比律賓群島**
定價十二錢 郵稅二錢

◎**已成西比利亞鐵道**
定價二十四錢 郵稅四錢

◎山本庫太郎著 **最新朝鮮移住案內**
定價十二錢 郵稅二錢

政法書類

◎**選擧必携**
定價二十錢 郵稅四錢

◎ウエストレーキ原著 深井英五補譯 **國際法要論**
定價一圓五十錢 郵稅二十錢

◎米國ローエル氏原著 民友社譯述 **政府と政黨**
定價二圓五十錢 郵稅二十錢

◎農商務省山林局編纂 林野**法令**
定價十八錢 郵稅四錢

◎深井英五譯 英米佛 **比較憲法論** 定價二十四錢 郵稅四錢

◎**支那論** 定價二十錢 郵稅二錢

◎**責任內閣論** 定價二十錢 郵稅二錢

二十二

遺稿類

故横井平四郎著 男横井時雄編

◎**小楠遺稿** 上製金一圓五十錢 並製金一圓二十錢 郵稅金十六錢

社會及經濟書

◎鳥井齋太郎著 **資本の下し方** 定價十五錢 郵稅四錢

◎小西孝太郎著 **勤儉儲蓄のおもむき** 定價二十五錢 郵稅四錢

平田農商務大臣及木内商工局長序
農商務省商事課長倉知鐵吉閲吉田虎雄著

◎**支那事情** 定價壹圓 郵稅十四錢

◎米國文學博士 東郷昌武著 **トラスト論** 定價二十錢 郵稅四錢

◎神坂靜太郎著 **經濟上の大阪** 定價四十五錢 郵稅四錢

◎乾坤一布衣著 **最暗黑之東京** 定價二十三錢 郵稅三錢

◎英國ギッヒンス原著 日本水上梅彦譯 **英國產業史(上卷)** 定價二十五錢 郵稅四錢

◎**英國產業史(下卷)** 定價十五錢 郵稅四錢

◎**世界經濟上の變動** 定價十二錢 郵稅二錢

◎**白哲人種の前途** 定價二十二錢 郵稅二錢

二十三

雜書類

◎育兒と衞生　高橋二郎著　各國參照　定價四十錢　郵稅二錢
◎國勢調査法　矢津昌永著　定價三十錢　郵稅四錢
◎地理學小品　平田久著　定價三十五錢　郵稅六錢
◎新聞記者の十年間　樓主人編　縣越停巷新式　定價五十錢　郵稅六錢
◎旅行日記　山路愛山著　定價上廿二錢並十五錢　郵稅四錢
◎伊達騷動記錄　人見一太郎著　定價三十錢　郵稅四錢
◎歐洲見聞錄　陸軍々醫總監石黑忠悳男談話　定價二十錢　郵稅四錢
◎況翁叢話　定價四十錢　郵稅六錢

◎東京市役所（第二）に於て調査（版）東京市職員錄　定價六十錢　郵稅四錢
◎娛樂俱樂部　定價十錢　郵稅二錢
◎事務世界　定價十二錢　郵稅二錢
◎學問の應用　定價十錢　郵稅二錢
◎武備教育　定價十二錢　郵稅二錢
◎技術涯用　定價十二錢　郵稅二錢
◎學校生活　定價十二錢　郵稅二錢
◎本朝美術　定價十二錢　郵稅二錢

年中無休
每號八頁

國民新聞

日露の開戰は
最も有力なる新聞
最も勉強する新聞
日本國民の相談相手
國民新聞の戰報
發行所

東京市京橋區
日吉町四番地

國民新聞社

定價一ケ月金卅五錢
郵稅一ケ月金十五錢

『國民新聞』が、始終一貫して、論下且つ報下たる所ろを也。今後の形勢も、唯た『國民新聞』によりて、之を知る可し。

故に大新聞中、最も眞面目なる、最も多くの讀者を有す。其の信用と勢力とは、日本全國のみならず、延ひては海外諸國にも及べり。

國民新聞の勉強は、既に世に定論あり。何事も受賣をせず、論說、記事、一として出處なきはなく、根據なきはなし。其の電報の如き倫敦、伯林、巴里、北京、京城にあり。特に支那朝鮮の電報は、他の及ふ能はざる價値あり。

は、唯た國民新聞あるのみ。今日に於て、有力にして責任あり、聰明にして信用ある此の新聞を讀まざるものは時勢に後れて、世の物笑となる可し。

は確實也精詳也明瞭也專門的智識ある者の手に成りたる責任ある報道也戰報の眞似は只た國民新聞を以て標準となす可き也。

民友社書籍賣捌所

注意　此に列擧する賣捌店は本社直接に取引する店又は特別に記入申込ありし分に限る
故に全國に於て間接に賣捌かるゝ店は此他に多數ありと知らるべし

東京市神田區裏神保町	上田屋	同 赤坂一木町	山口書店
同 裏神保町	東京堂	同 麹町區飯田町	神戸書店
同 京橋區銀座四ノ六	東京海堂	同 麻布六本木町	北原書店
同 京橋區鎗屋町	北隆館合資會社	同 本郷巻木町	小杉商店
同 京橋區采女町	警醒社書店	同 本郷四丁目	文明堂
同 京橋區出雲町	新橋堂	同 本郷區巻木町	國光書房
同 日本橋區木石町	鶴屋喜右衛門	同	文國堂
同 日本橋區人形町通	至誠堂	同區元富士町	田中書店
同 赤坂區青山南町	山陽堂	同牛込區原町二丁目半一	關屋盈科堂
同 京橋區鎗屋町	良明堂	同 牛込區肴町	新文館
同 京橋區弓町	松邑孫吉店	同 本郷區元富士町二	有隣堂
同 芝區三田四國町	天野書店	大阪市備後町	吉岡書店
同 芝區愛宕町二丁目	中島百華書院		

大阪市北濱四丁目五六國民新聞社出張所
同　備後町　岡島新聞舖
同心齋橋筋淡路町北へ入中村正兵衞
同西區常安橋南詰四へ入文德堂
大阪市東區南久太郎町四ノ18　福音社
京都市佛光寺通り同三條通富小路四へ入北側　東枝律書房
同　寺町通り　便利堂
同　河原町　飯田信文堂
同二條通り河原町東へ入寶文館　大黑屋
同　丸太町寺町四　前川書店
横濱市吉田町一丁目　第一有隣堂
同　伊勢佐木町　勉強堂書店
同　野毛町　第二有隣堂
横濱市吉田町一丁目　金海堂
神戸市元町五丁目　吉岡支店

同市　元町五丁目三十四　石丸日東館
同　市元町二丁目　川瀨日進堂
名古屋市本町　川瀨代助
同　玉屋町　靜觀堂
廣島市盤屋町　積善館支店
同　東横町　弘文館
同　大白町二丁目　東西堂
東京府下八王子町　熊澤乘太郎
山城國向日町　須田正進堂
丹波國福知山柳町　足立攻城館
同　越山文進堂
大阪府豊能郡池田新町　鹽川豊翠館
丹波國柏原町　中井正吉
但馬豊岡町　由利安助
淡路國洲本町　成錦堂
越後水原町　西村六平
同　長岡裏四の町目　黑十郎

同　高田町　高橋書店
同　新發田町　萬松堂支店
同　龜田町　潤身堂
同　尼瀨　佐藤清三郎
新潟市古町通　北光社
長崎市野屋町　安中半三郎
同市　集榮堂
武州川越町　集成閣
武州兒玉町　中村文會堂
千葉町　大澤郁文堂
千葉縣長生郡茂原町　松本順一郎
千葉縣四街道　梁瀨書店
水戶市櫃町　寺井文明堂
茨木縣水海道町　新々堂
茨城縣石岡町　國文堂
上州富岡　木田商店

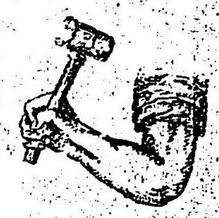
上州原町　山口商店
上州桐生町　大出三泉堂
宇都宮市大工町　內山商店
野州足利町　三泉堂
伊賀國上野農人町　安屋勝次郎
伊勢國松坂　清玉堂
三州豊橋　富田安一
遠州掛川町　叢文堂株式會社
靜岡市吳服町　內田書店
同　同　太陽堂
甲府市櫻町　眞盛堂
大津市　文泉堂
近江長濱町　同支店
美濃大垣本町　渡邊商會
飛彈高山町　平田鈴吉
長野市　齋藤祥三郎

同市	西澤喜太郎
同市	信濃毎日新聞社
同市新田町	荻原朝陽館
信州上田町	西澤支店
同上田町	百合舍
同野澤町	岩下新聞舖
同岩村田町	文盛館
同松本町	鶴林堂
同町本町二丁目	慶林堂高美書店
同洗馬	都筑文明堂
仙臺市國分町	佐勘書店
同大町	木文書店
同新鄕馬町	但木芳次郎
福島縣福島町	漸進堂
同同	鈴木萬助
同白河町	與村書店
同白河町	石井書店
盛岡市	鶴鳴閣
陸中一ノ關大町	文港堂書店
青森市	鎌田書店
同市	青港堂
弘前市	桂華堂
青森縣八ノ戸	伊吉商店
山形市	八文字書店
同市十日町四百二十六	荒井明治閣
秋田市茶町	成見清兵衛
同市縣廳脇通	大島開成堂
羽後國增田町	東海林書店
同大舘町	越後屋虎五郎
同酒田上中町	中村書店
若州小濱	吉岡昌太郎

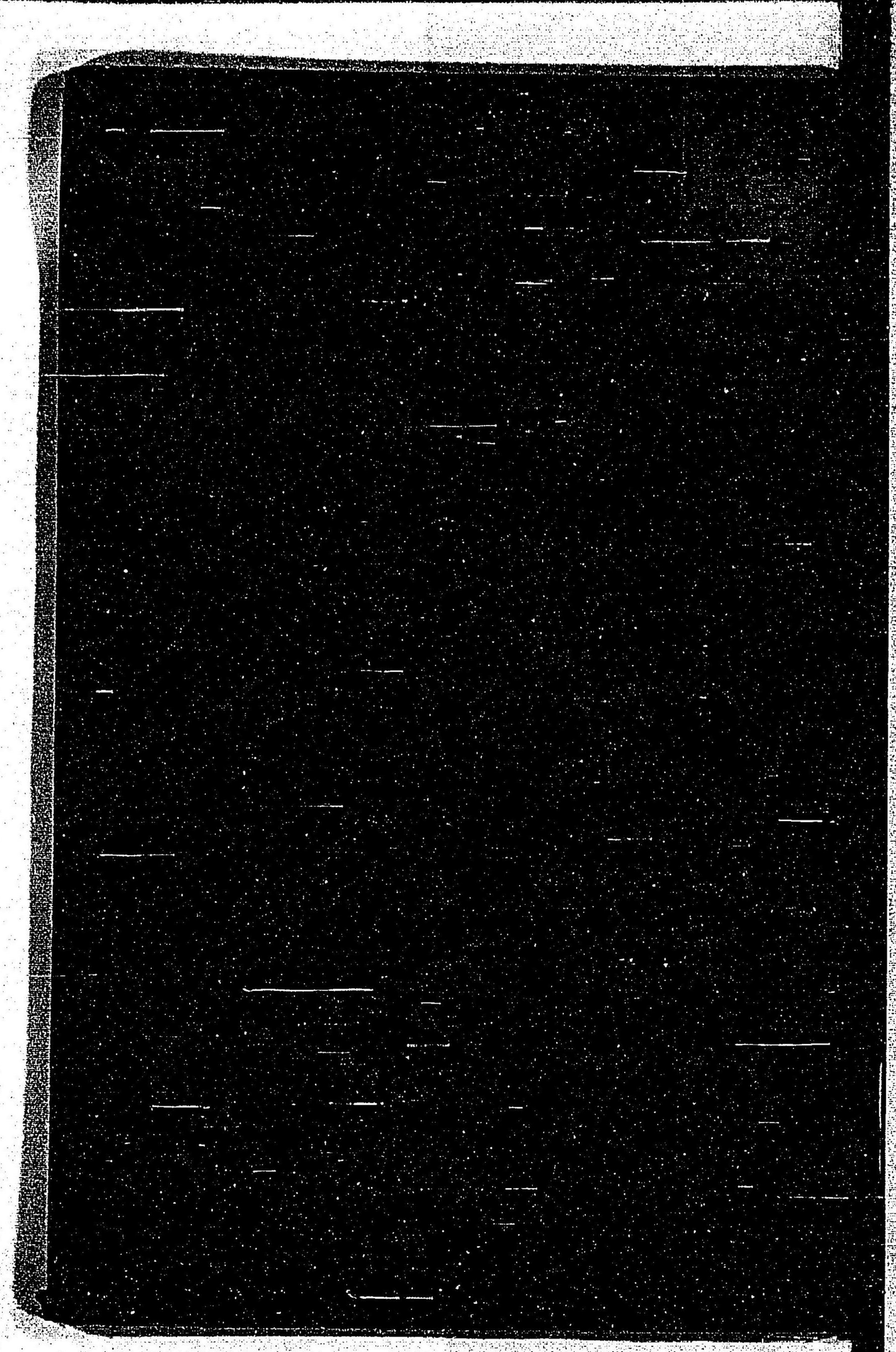
福井市佐佳枝町	新堂
同	品川書店
石川縣小松	宇都宮書店
金澤市	同支店
同市	佐久間商店
能登飯田町	河內勇作
富山市東四十物町	中田書店
同市	小林清重堂
高岡市寺山町	學海堂
越中川邊	弘文堂書店
鳥取市上魚町	山本吉太郎
同市智頭	藤谷旭日堂
同市東町八十八番地	久松堂書店
伯州倉吉	鳥飼榮藏
松江市	川岡清助
同市天神町	大蘆一年舍
岡山市弓之町百三番地邸	周營堂
同市四大寺町	奥田金正堂
同市丸龜町	吉原弘文堂
同市上元町	本鄕發文堂
作州津山元魚町	横山萬竹堂
備中井原町	萩田書店
山口縣山口市中町	超世館
山口縣山口大市	白銀日新堂
下ノ關市	山名書店
周防國岩國	白銀日新堂
和歌山市中橋地點	宮井宗兵衛支店
松山市	向井藏次郎
愛媛縣宇和島町	日進堂書店
同宇和島廣路通郡役所前	杉山靜清堂
高知市	開成舍

福岡市博多	積善館支店	同
同	眞海書店	同
同	森岡書店	宮崎上野町
筑前若松町	石松國吉	鹿兒島市
久留米市	菊竹金文堂	同 同
筑後國八女郡黒見村大瀦	野田成章堂	同 同
同 三池郡大牟田橋口町	上野書店	北海道札幌南一條四丁目
豊前中津町	野依暦三	同 南一條四三丁目
豊前行橋町	高橋種成	同
大分縣大分町	甲斐治平	同 小樽港
同	菁莪堂	同 石狩國上川郡旭川一條通七丁目
同 縣竹田町	高野菊三郎	同 道十勝國帶廣大通リ七の十
佐賀市	大坪書店	羅濳基隆草花街十一番戸
熊本市新町	長崎次郎	同 臺南草花街
同 南新坪井町	好文堂	韓國仁川港
同 上通五丁目	中山知新堂	

同 通町	石原書店
肥後八代町	時昌堂
宮崎上野町	修進堂書店
鹿兒島市	吉田幸兵衛
同 同	金光堂
同 同	谷村書店
北海道札幌南一條四丁目	進振堂
同 南一條四三丁目	新聞寫摺合名會社
同	富貴堂
同 小樽港	川南軍祐
同 石狩國上川郡旭川一條通七丁目	旭書院
同 道十勝國帶廣大通リ七の十	久富書店
羅濳基隆草花街十一番戸	小西日進堂
同 臺南草花街	龍泉堂
韓國仁川港	山岡書店



98
7



002892-000-7

98-7

日露戦争忠烈余芳

吉田　宇之助／編

M37

ACB-6451